

親鸞聖人繪詞傳 二



親鸞聖人繪詞傳卷二

兼元元年丁卯の春北國一流罪の難よわひあへ
 せしむる事の起りは深きぬらに源空聖人專
 依念佛無のゆて都鄙の教化風の如くは
 一各處の海仰州の如くはびたりこの時南都小叢
 の僧徒擧順とてうききふ念佛門と傳廢し
 源空聖人兼に門弟等法を流せしむる危しと
 上疏再三よ及り魔障を断つる如くは
 沖弟子の内よ住蓮安樂をわやする事有り
 こはゆ中へ古御門院御宇兼元元年丁卯二

月九日任連安樂法廷より罪科の定め
同日の八日深室聖人并に足院道の弟子
等九人の宣旨以下より長信房も死
罪流罪の中より議定いさむと變じりしに六
角中納言親経の年以一家の親のつら
が時に八元より列てつらしむるに一室
てを流し定むるより三月十四日夜より
房をとりて聖人の許へ沖胸をもち入りけり
沖教をいふに承りてさても我々の志門より
より心未七年の春秋常通院近より鶴林

の夕まで沖側とよまきりて思ひけり
よと青限りの身と成て仰いぬ海の浪は深
あひ我の北陸の皇に遠んを前せしむ形り
為縁がやうるよと別とすて又いはるる
よのよきとして沖涙よとよまきりて身人もたよ
や沈むなむ明日はもたぬをの身乃再會
い川とよまきりたが何事も津たよとよま
く何とよまきりて沖涙よとよまきりて
よまきりてよまきりて若くは房も血の好まきり
よまきりてよまきりて



三月十六日卯刻に長良房の浪東若所の沖坊
より出駕去りたまふに、師範源室聖人、
都とて配下よりいさむるを、
二都とて配下よりいさむるを、
二都とて配下よりいさむるを、
二都とて配下よりいさむるを、

罪名 流人藤井長良

配下北陸道越後國頸城郡國府沖年三
十五歳追捕檢非違使の府生小槻行連送
使の右左衛門府生秋葉形
九條殿下りも、
尚氏沖人送りとて副をたすむに、
十三日辰

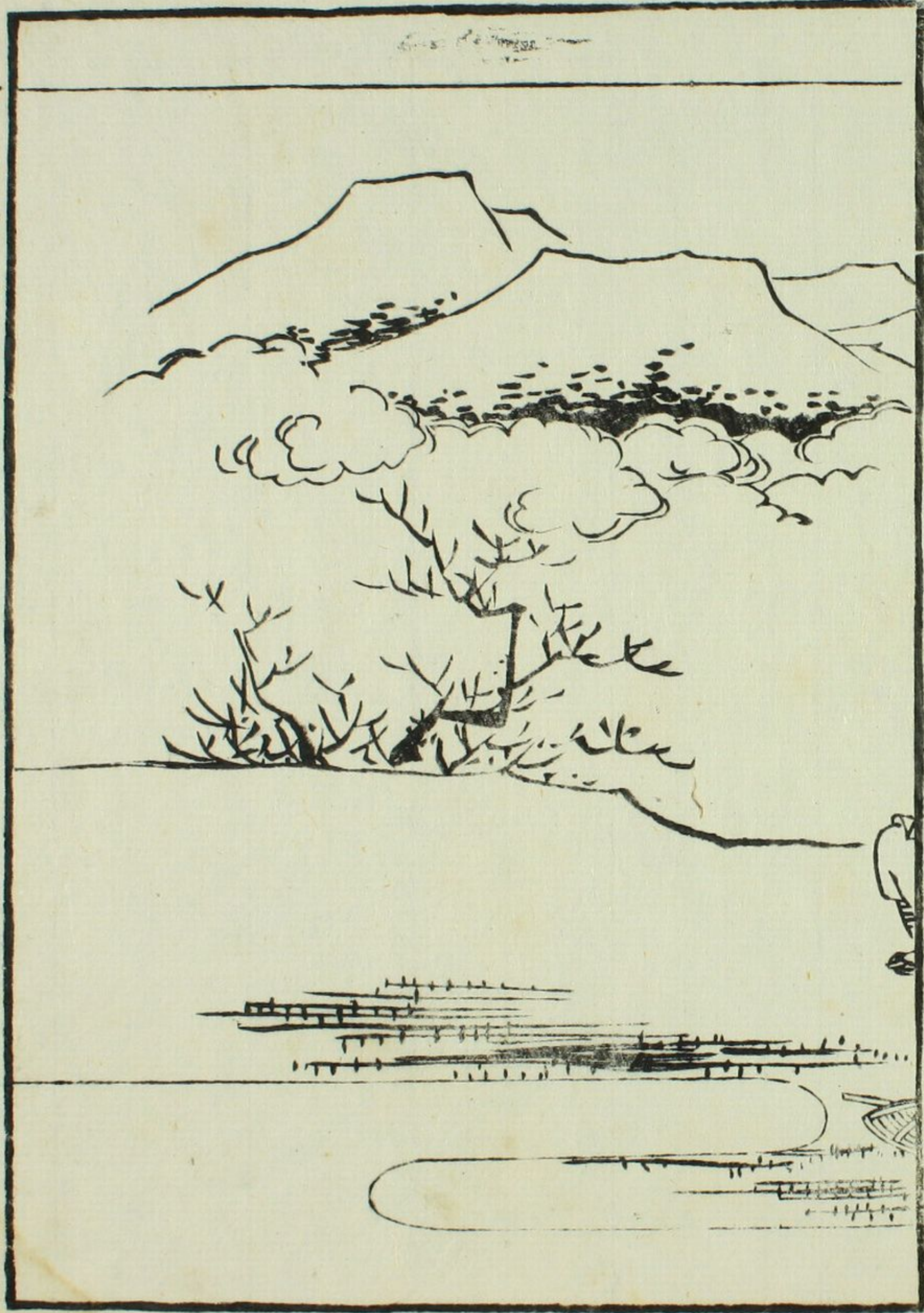


て三月廿八日先頭城郡司萩原氏部女輔奉系
が許し免たまふに後好く四月七日頭城郡四分寺
の福舎に移りて代りてわたり小狭少りり
て氏部女輔けりて四分寺乃東南平家より
取らるる宿室は三河に在りて福舎六年
の百八十九日辰もせりてかゆらり
みく在りて思虎と名のりたまふり又沖名
とも親鷲と名りてたまふり
三十九年建暦元年辛未癸十一月乙未中納
言範之に命じて治と免せりて速に登

里のくたをなすも折や一痛をり小狭り
たる也先沖清文と名を勅免の沖礼と名
ありて沖清文と名を書てりありて名
もたはれ免りて名を
還治の少治に命じて免たまふりて名
せて名をりて名をりて名をり
て宣取入の十二月廿日小入治と名ぬり
表はたすはありて名をりて名をり
ぬきも折りも雷息ありて名をり
形く其年と名りて名をり

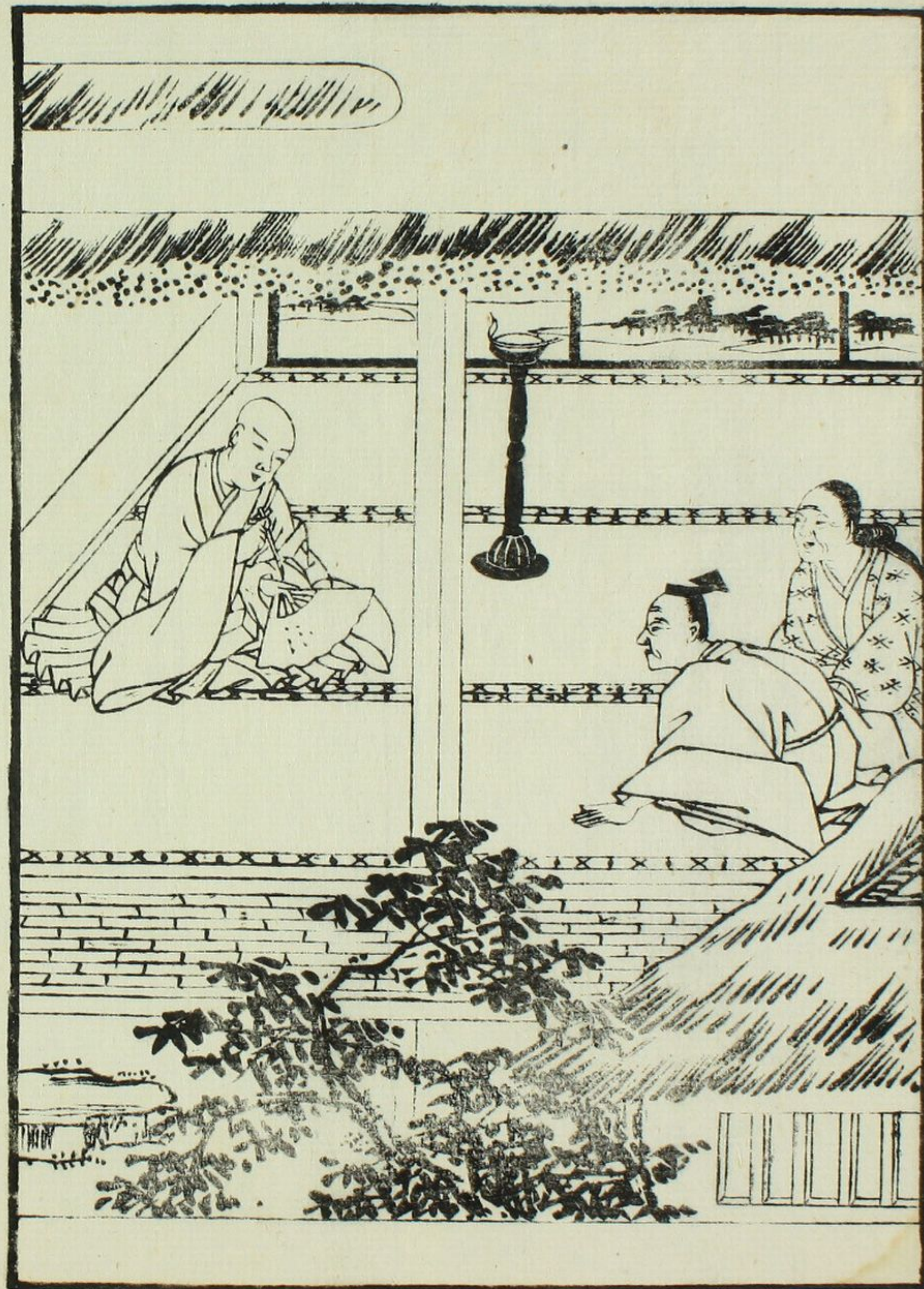
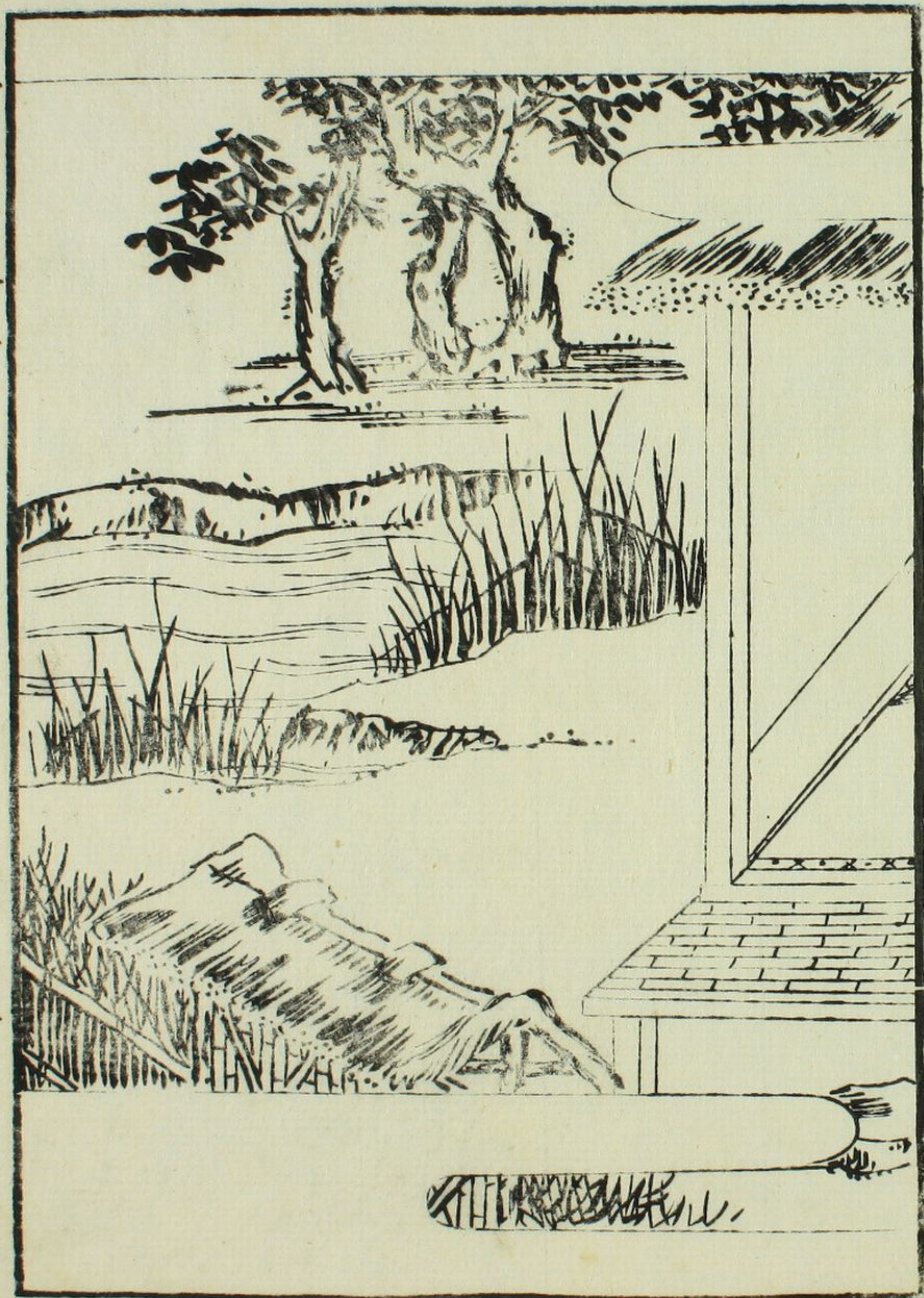
何く百年の睦月の未雪も漸晴て旅人の跡は
さしむら便わりのそ聊沖不快とも思ひぬて越後
の玉府と云ふぬれども名雪がな涼々ねど
北陸の嶮難沖通行多し雅くは供奉の人々
しれりまば位儀治たかりと居候と云ふは聖
國ははより又西たまりて空聖人の心月と旬より沖
是例を日暮目入滅のう慥に因あり今まで穢
石のどした沖をよらまら弱りて同絶して居備よ
傷や血の涙と流したまひに此は今もあままで血の通
と名づく今ハ沖と系は息かいても詮かへまど御美

例も全快はしすまねばそわらぐ供奉の令類ある世
はこころ又越後沖りあまに聖に濃お國の俗聖人の
ゆほとて隣里をわといふはちまたに居候ぬれは人を
こころこやりて空聖人沖入滅のうはいまご故にたりても
何ぞんまど聊刑と云ふて滅後の化儀となんはそ
日月中旬と前住州のるん沖居るましくなる又日月中旬と
光寺小系消去の佛ありて浦経を佛し今中の玉願は
初志より具夜陽反臥せりて帰く感應のむじふ
ぶら伏候と云りうて七月よあままで越後越中亦小
ありて御教化の形



二月半の比類後園柿崎よりあひしに日すきふ言た
及んらん折し五月あともく折しうぶ
三里の畠家小畠氏の門に之ありあむ
て一室とてあひしと主人性貪にして借すべ
其人方折して夜半さるまで門のけりふましして
折名さるふ唱居より王御聲のいし珠指ふた
かくらりくればふすが主人も感激してやわり久一畠
氏ゆりしとせがり聖人思召らるる坦士の麻生業感の
病ゆしといふも法身のお命何ぞはくる事ゆん十
方麻生の誓約のり人氏漏えんやと終夜お勤まへ

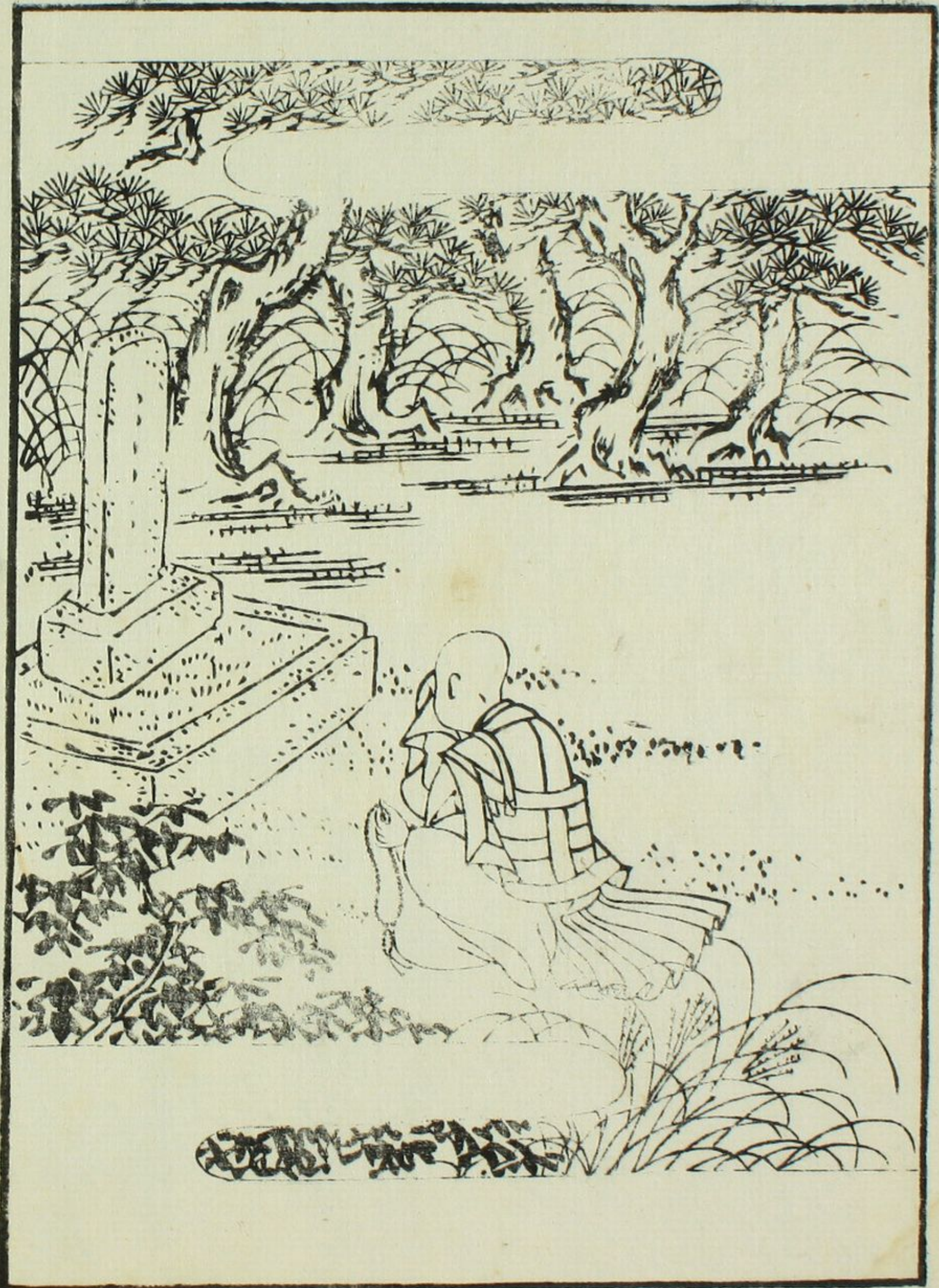
と夫婦おし流く飲解して信心飲花の人と折しり
聖人も折悦のわたりしと戯の折は号に
柿崎よ志願く密伝るるるる主の心懸柿を折る
と扇たあうして密に残し重噴よ及びてと密伝心
とふ小折あましくりる夫婦起出て大よおあき
水各残ととて水伝伝あふり小と川と渡
つとこのあふ光る夫婦水も伝もあふ川伝越
折る見伝も望しと六字の寶号伝書して
興つたまたり世に川越の名号とてふと
是りり





おろき年八月七日はひと越後と云ふおま
 都ふかりあひつ先室身人の沖墓の浦く
 たまひ師身者其乃薄きこゝに歌に
 泣く事言渡したえり夫より尋有
 僧の里坊入あひ靴走りて就て勅免
 の中礼をせたまふ尋有僧那とて身人の
 念身形りうきては傍にあり沖途にけり
 りあふあに先子の所へぞいせたまひる
 叔月輪祿定の沖墓なるに玉日前乃
 墳墓へも訪であひて懐旧の涙せられたり

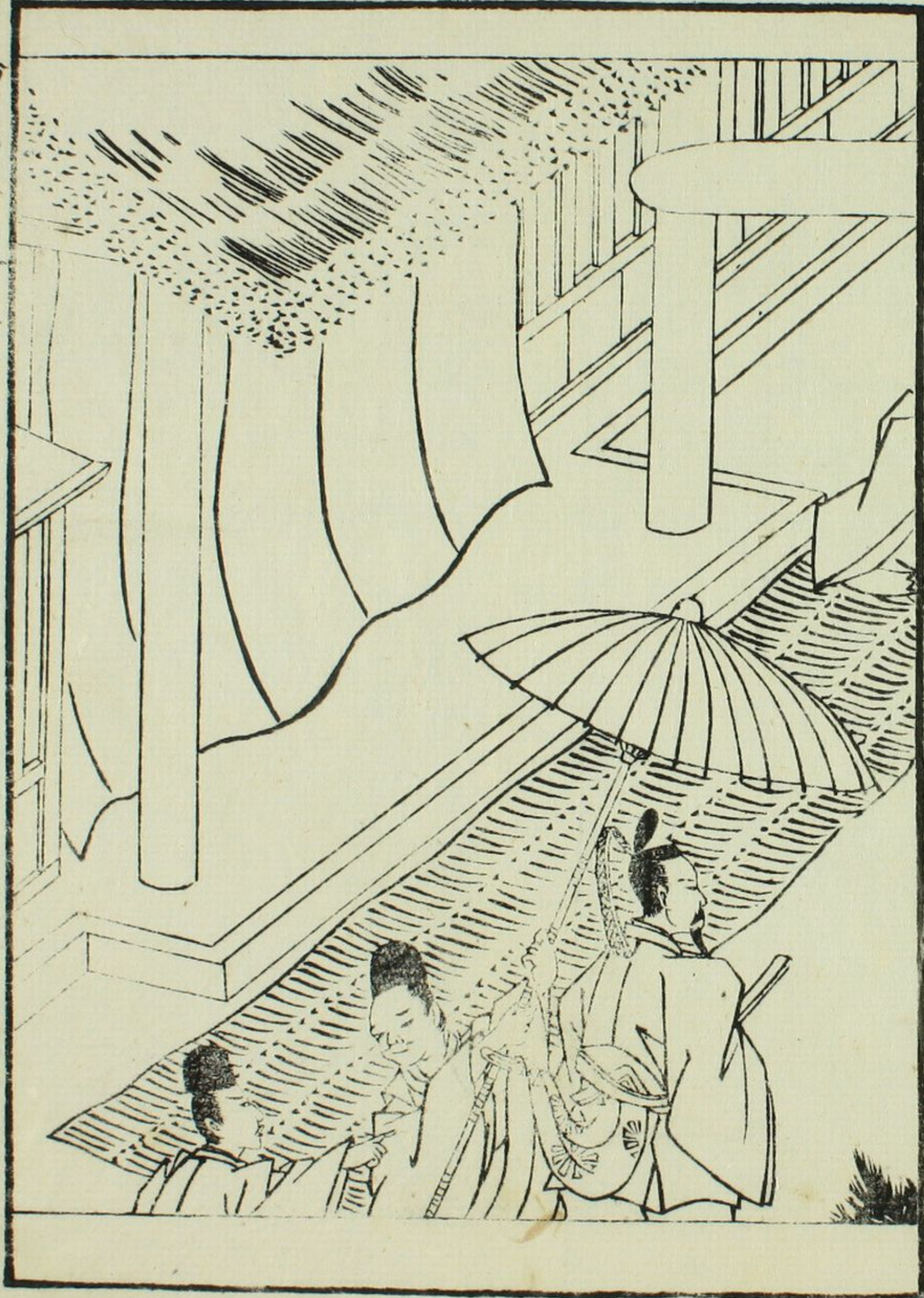
たまひ印信も中成りたりと玉目の中墓
 して今更純馬の心成してあそぶの事
 ども語りけりて哀傷を涙と成す
 なる身人と先室の宿室へ中接りたり
 以後西洞院の旧坊へ入りあひたり

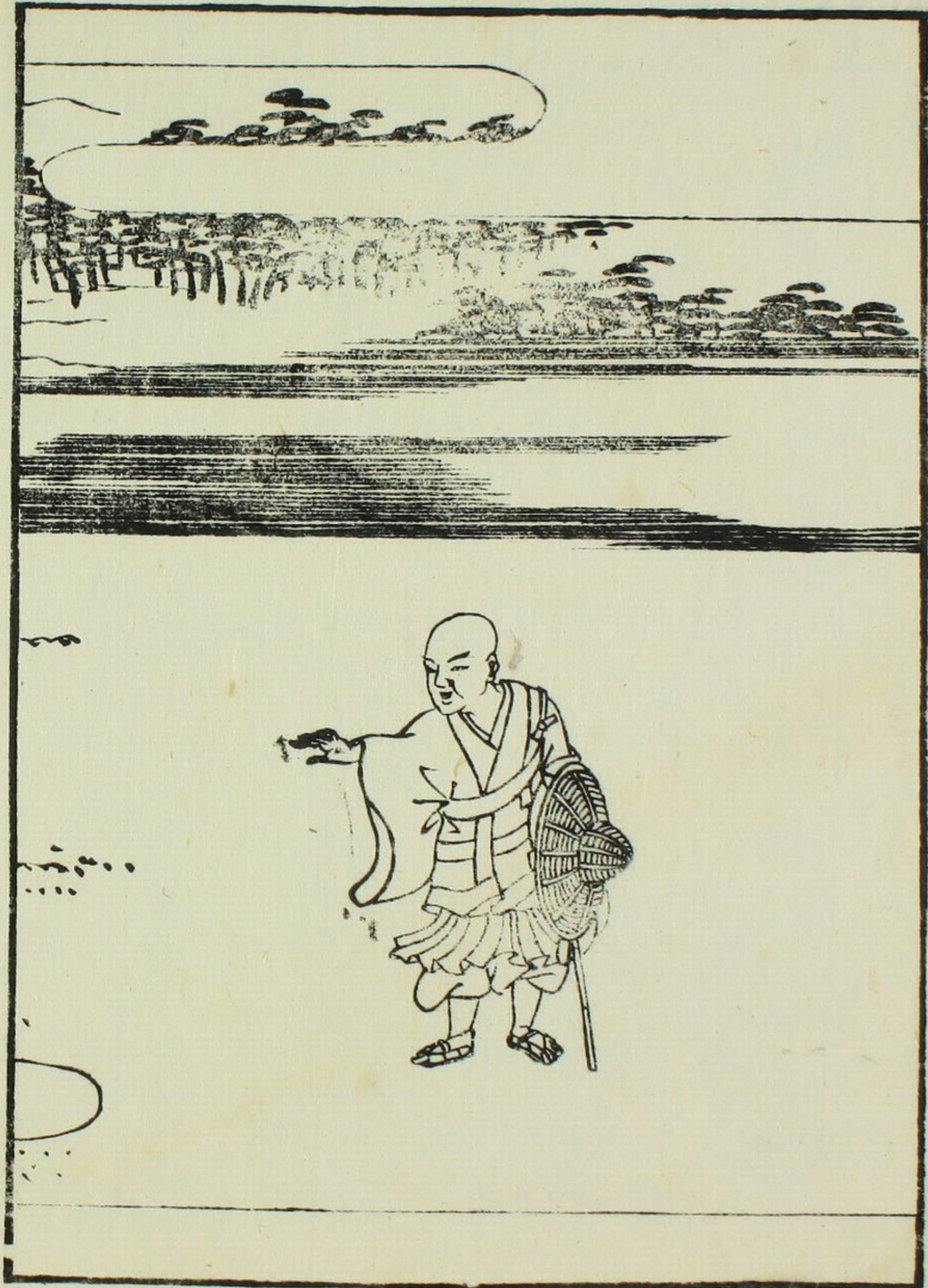
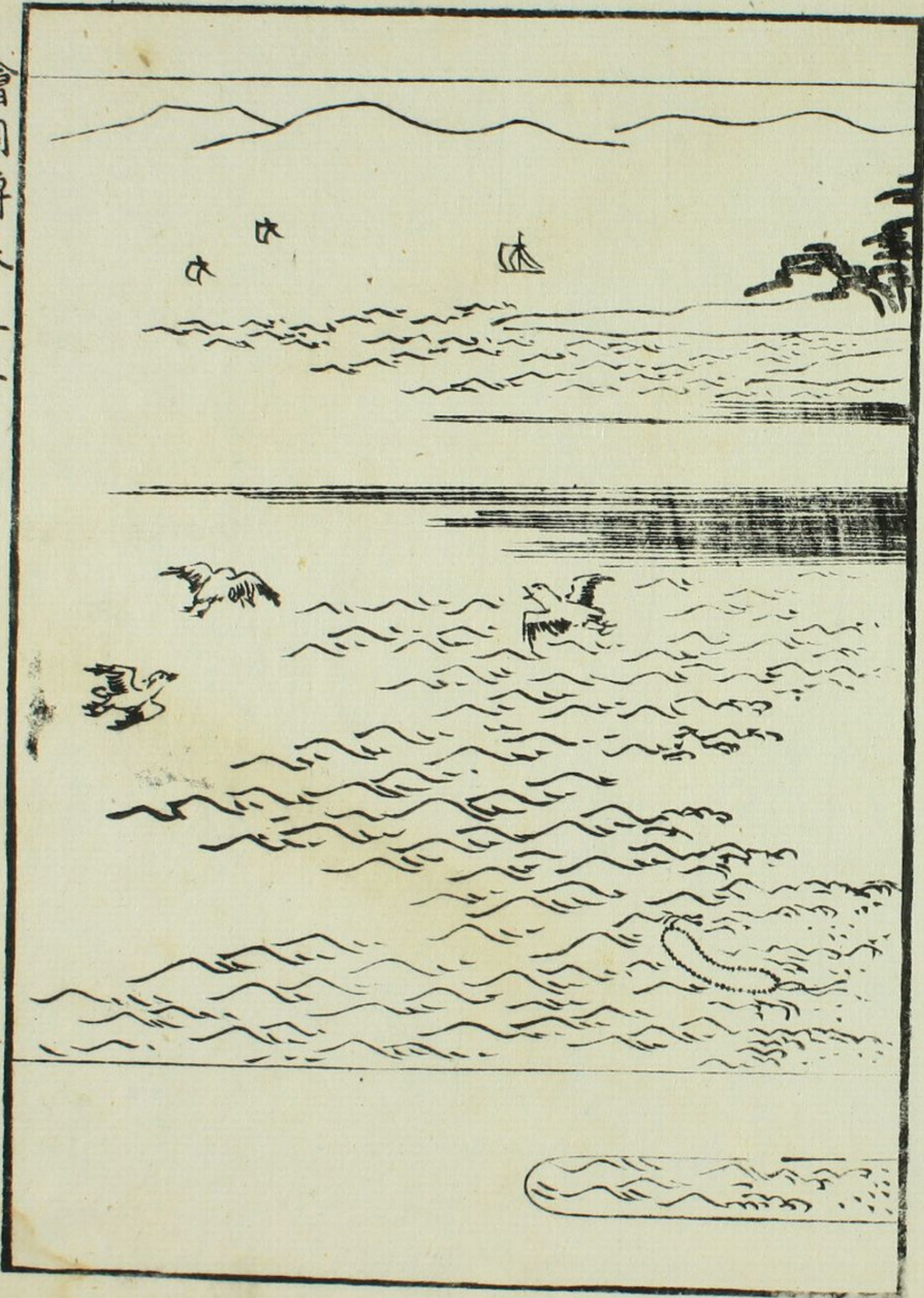


お形おなまきき年九月野人城州山村村一寺
 氏うぢ彈たま創つくしめい見みへ江州荒本村と源海也
 りり信しんありふの人乃達たつ臨りんにりりてり後のちも
 勅しやく号ごう氏うぢ賜たまふく真ま心しん寺てらとみけく
 おかきき年十月が不ふ辺へ鄙びの群ぐん崩たふと化け蓋たふ
 せじがふたゆゆび花はな流ながとわく東あづま関せきよおし
 しききためいまよ太たい神かみえの園うゑん家の宗そう廟ぼよ
 しそ殊こと又また先せん祖ぞ乃の靈たま神かみ好このまはも神かみ意いも
 深ふかく又また和わ夫おとの結むす縁えんも鳥とり困こま形かたちと糸いとをを時とき夜よ
 深ふかく乃の便べんやりて伊い勢せの神かみえへ糸いと指さしし

ちやん人里わしと風あけてあつたあぢ
 のわらど聖人の言容はうかやしく驚歎
 てりうくもめん也人よましゆらん絶倫
 の美相わり音より名信る徳の美言した
 まよふや中だぬやうやうりあま兼は
 派きて信形派傳の例かりしそ新しと兼
 是は神進と聖人の心と急用ましくし
 神殿よをばきたまふと誓櫻の神官わり
 訪ふは風情とて跪てりうく前夜夏と
 感づるやうり神を僕よ告たすけく明日

しが業むびと傍の叢はは悉て来ふと
 何ん是は瑞垣の内よいとよ我とく對面
 せんく神勅くのぬし穉退の危うとん
 聖人の玉垣は開き正教乃石坪に入奉
 聖人二時げり多備あつて我化身ま
 神通よ子ふしと志むく感激して退
 おしなふみりるまより竹都はとて園
 坂と名く阿古木が浦は地なり一奄蘇那
 の酒乃道派まざりあふよ入江の磯よ白鷗ま
 又鳴て飛乱るまよりて見えあふよ奇來の浪の



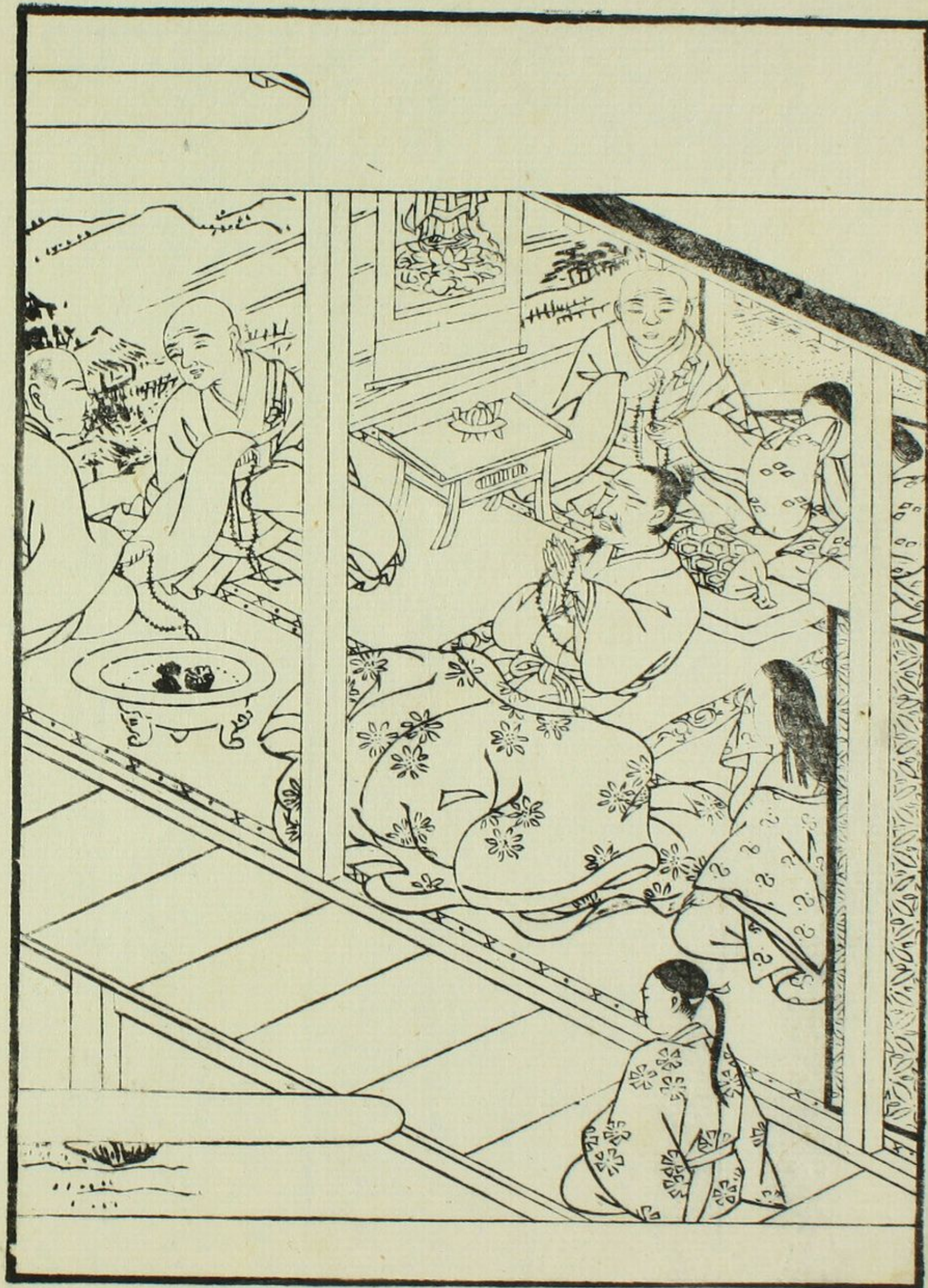
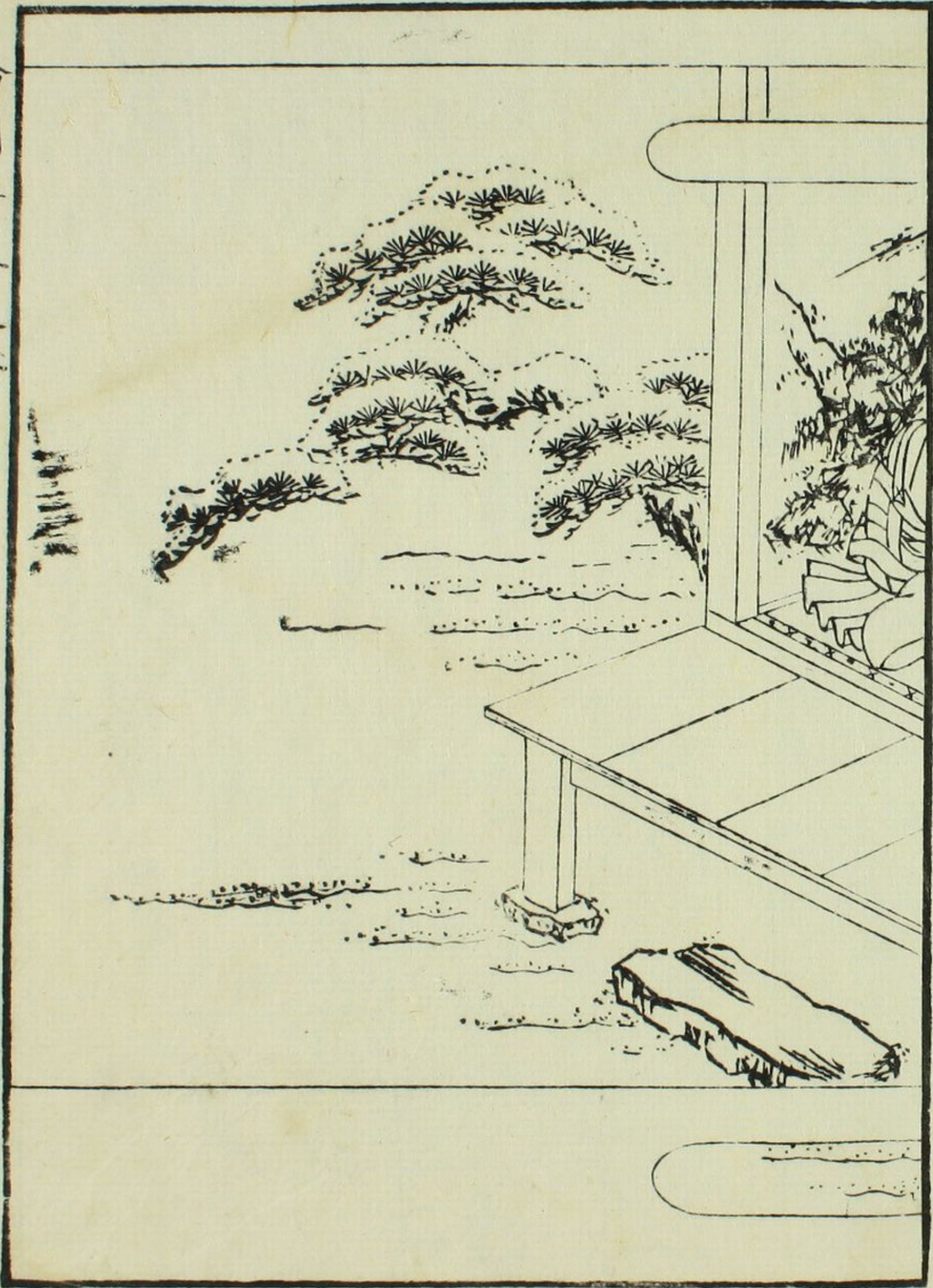




善小如意摩尼の響あり聖人思ひのり
 後代我法の業ゆゑに所せんかゝる
 所持の多珠と浪に投入てとたなり

素名の沖磯より又姓に沖ありて夜は此の漁父も
野人よりありてより世に業のゆき中んじり
を罪はくると生も生も暮るこや宿業のわらひ
かひくゆりうる身も後世たあらぬ危
わらひ願くふ承りたまふ深くと嘆き
野人宣くれもく只るを浄土佛の本願はこ
やう形を罪惡を智のまを救はんが形を疑
形くれもまはれまはれ信の言をいひて皆生
ひ遂るまはれまはれ信の言をいひて皆生
こ位老と成て殊務の社生はげたる野人

日月廿二日常陸國下妻の小嶋の郡司武氏が許し
下妻在京の時に先越後下人の沖をかりし武
弘の御前りの沖をみりて御前りて使奉
りて切上振詣りし武弘の御前りて使奉
りし武弘の御前りて使奉りし武弘の御前り
は其年の冬越後之と定めてかくて越後紙中の内平に
移住せしめては化盛あり又信州之州の辺にあり
あいて化盛の御前りて使奉りし武弘の御前り
の郡司が許し横官根の性信房は沖途とて越後
せり性信房の郡司武氏一家と野人の性信房



崇徳より中興子成る人なり
建保二年二月中旬聖人常州下妻の郡司が件
入り武弘子て唐室と没て聖人と安産
り又又國判官代兵部大輔之長を教女
と聖人二給仕て心是慈行房以下孫女等
の母りりかくて郡司の信師と仰ぎ依
おと位者なりが建保四年丙子十一月
六十餘歳して殊勝の性生は遂少なり常
より法氣なり武士より人えし善提心なり
り信師の目を度事九時人ふらふなり

下野國都賀郡總社村室八嶋の神宮大沃掃
の友宗より者聖人二使とすつてト
友九尋を底乃池あり昔り毒蛇とみ
時害とり人氏やまきり流り願く
寺師冲駕は回法を伝ふきたり現
者の利道何事うはまんと聖人時を
ま一化の幸也とて明日原て彼地よむ
あ友宗大に收びをくお逢く九時
とふら聖人とす件のはる聖人
産後後三日夜誦經說法をり池水忽

浦之を浪間より仰りの女人おりて
 聖人と礼拝し涙泣して曰く我を前世
 富家の妻として作すが天性嫉妬ありて
 罪めきた多くの婢妾を殺し遠慮がどよ
 危くは主瞋念の報よりて今大蛇の牙と
 交り眩の如くおのが牙は焼く其苦痛
 たくと取しおのり焼くいま師の法ぬま
 身よせまき之熱の焔や消ぬ願くは三
 日のうち師の法力は果て我と天の果報
 法得て妙花とやうして志願は供養せん

聖人須臾一あり後二日よち風おひり
 小吹て池の中より雲立の如く中より女人
 あり忽ち菩薩の形は現し寶冠は傾て
 聖人と礼しおのり系して去り其四方
 小煮して天より奇妙の華あり降り地よ
 落しおのり見る見聞の人と驚嘆せざるは
 一とてこりけ地と花見園とび又かの池
 とて親鸞池と名づく



建保五年丁丑芝間の道俗小嶋よ奉て
りし郡司致ふも既し師のそしは文て性生
の申をよとげしとたり今い沖知よかり奉
も依すト芝間の迎を信心の門徒多て日
夜津教乃慈望わく付まは彼地一居は極
まんとまきりにトバも極悪心かきて
とかりら彼地よ極りあひたりもは相田の
沖坊よりいふに在と奉十年毎り初ふ
出棲ははら下も道俗迹はたづみ遠戸
は因ふ下もそ賤あまことに道るは此時聖

人思ひたましく迎敵の化保いま時と得る
り佛法に通の本懐とん成ぜんともそのく救
世菩薩の苦命とん符命とん似りとそ
表のわりとぬき條りて人えりとの
下妻よ源三位入道に改が未孫兵庫氏宗重
と云ものわり一門頼茂が謀叛よりりて
日えわりの由沙汰りて捕らり是既し刑せ
らふんしん聖人らとられし乞福てと
取ら利髪せし先沖兼ふとらり
連任房もかり

四十八葉のころを麻鳩行方真神南
 辰園府柙岡羽黒小栗りまの四と
 夜化しきもいふも業とりま里小寺あり
 其寺内の墓より女乃姿あり妖鬼おて
 人氏世々事度くやり青信法かと思し
 て種々の行法と他とれども居てその験し
 りりたるをまゝ人の許しあつて戸屋
 奇くくのゆりぬきいそのくゝ悪八神とい
 へり山城のむけりがわつ時月明と教はるり
 被に埋し墓より四十年來から妖異と

おして寺院既と魔境とかりり孫がく
 いたし仰慈慈氏棄てり氏叔と人と聖
 人聞り経と化の清涼風とくく海危
 頭王の大悲りかみ逢の者ととて夜々益
 教の業何ぞ佛かと漏んやとて在りて
 その所と性たすん東國の男俗りまは
 小石氏りりりて三部の經典氏書りた
 養よりうづりてみ箇日のわらど浦経多佛
 ちるもへ里満夜と及びて塚の中と聲あり
 て云我慈慈と懐して昔はうくは事也

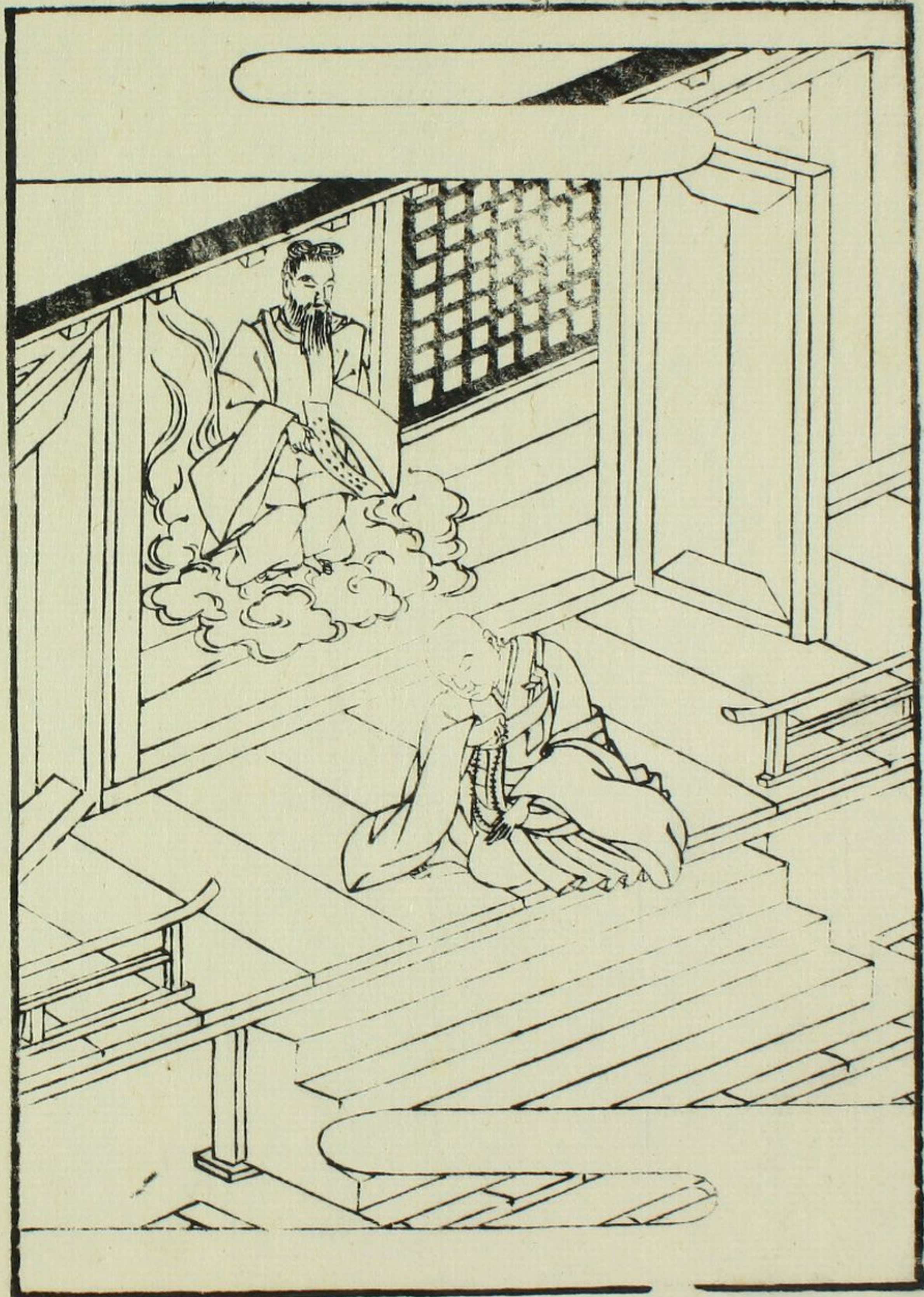
十年たたく人間の前よたたくたその若
 こがし道るものありぬに今まで妖狐
 りせりゆらん今大長谷の法かより
 をとけなくも極樂よ往生ん今より
 妖笑わるべうべと聞よの毛いよ立て
 且ハ長と且ハ海とびて多佛の歩持と
 感しものなり果してそのらの妖笑わら
 事なりとらに麻鴉の神宮尾張守中
 臣に近ハ件の不思議と感心志何ぬ
 りゆく聖人又眼しより二男破碇次

即ハ廣派聖人の沖牙子とてぬ
 伝房是なり

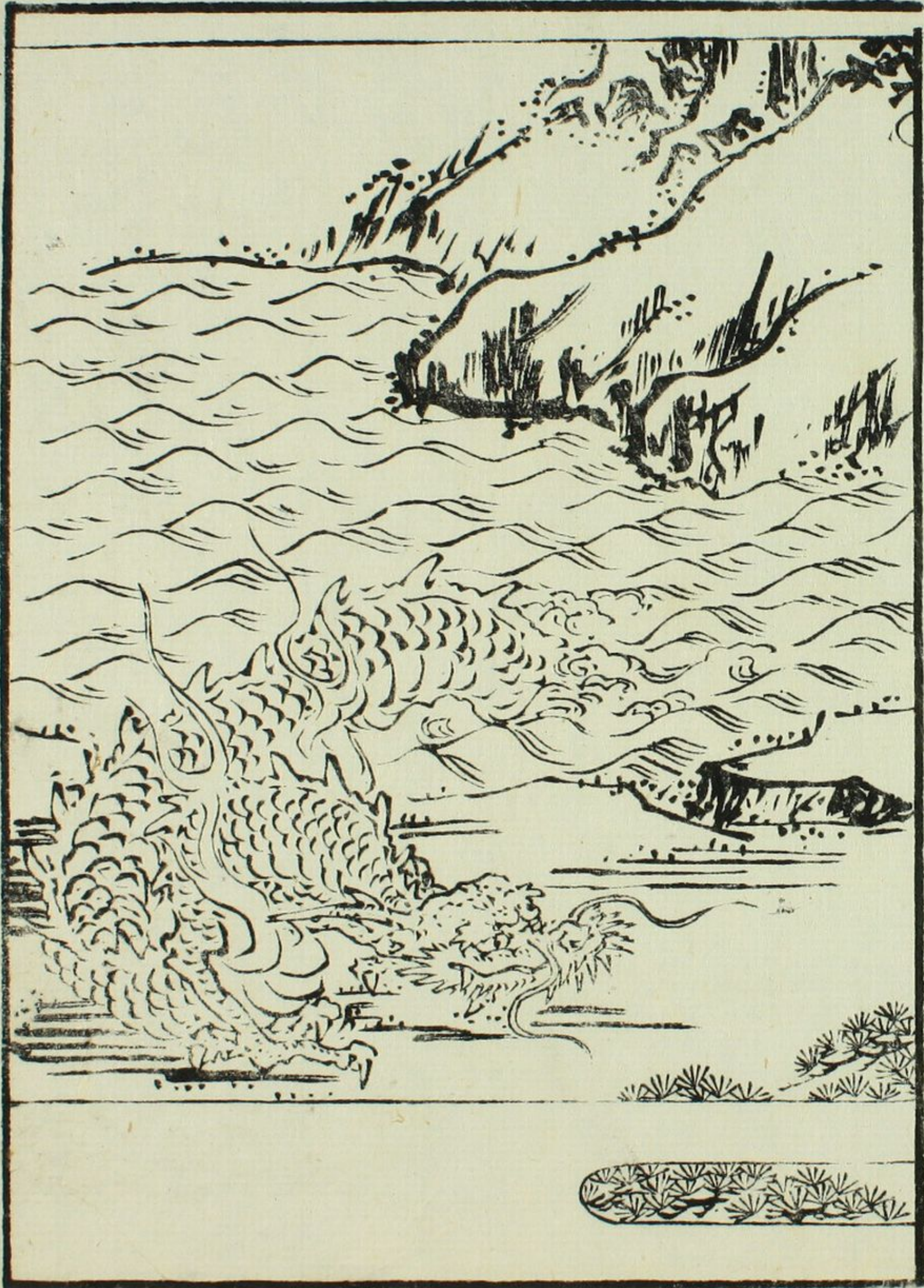


のり時開東の法流志をくく（く）灌礼（くわんれい）する事ありて
 聖人とも偏頗（へんぱん）あり人なりと沙汰しわき
 肉身に中り人多かりき順信（じゆんしん）房（ぼう）嘆（なげ）き堪（た）み
 麻鳩（まきう）の神（かみ）一七日（いちじち）未（ま）荒（あ）し馬（ま）人（にん）を（を）引（ひ）人
 としてまじきまじきといふりの誤（あやまり）も偏頗（へんぱん）も惟（ただ）下
 實（まこと）に柱（はしら）化（け）おくまじきまじき又（また）誤（あやまり）か平（へい）いふ
 らん（らん）とて四（し）神（しん）と（と）な（な）ま（ま）と（と）丹（たん）藏（ざう）は（は）ふ（ふ）り（り）て
 初（はつ）より小（せう）満（まん）夜（や）よりりてとくまじきまじきらる
 夏（なつ）の中（ちゆう）ふ（ふ）の神（かみ）亦（また）現（げん）し（し）て（て）の（の）こ（こ）ま（ま）り（り）く（く）長（ちやう）信（しん）と
 まじき柱（はしら）化（け）の聖人（せいじん）ぞり（り）唐（たう）の道（だう）緯（ゐ）禪（ぜん）師（し）

の後（ご）妙（めう）なき色（しき）ばいり（り）ぞり（り）い（い）ら（ら）る（る）とわ（わ）ま（ま）り（り）の
 け（け）さ（さ）き（き）や（や）とて一首（いっしゆう）の（の）お（お）奇（き）氏（し）保（ぼ）とてさ（さ）じ
 し曰（いは）
 ち（ち）柳（りゆう）の（の）ふ（ふ）葉（えつ）の（の）い（い）ふ（ふ）る（る）も（も）一（いっ）木（ぼく）の（の）松（しょう）乃（な）色（しき）ハ（ハ）か（か）ま（ま）じ
 こ（こ）も（も）より（り）二（に）心（しん）が（が）ま（ま）り（り）沖（おき）舟（ふね）子（こ）は（は）較（かく）入（い）り（り）る（る）を（を）



威時聖人常陸の府中より若國山の東乃路
 とて相田の事庵より今被之の林麻の深
 淵より大蛇出て聖人小相りし長之丈餘ま
 じふ怖づこわりさぬかり聖人之あて汝
 我と害せんそあやまこまよふ用わりて
 あらやこ同りよ大蛇取とげぬ眼涙と
 流し事ぬの如し聖人の志は系したるひ
 佛法も改悔懺悔より事わり汝今夜
 月がまの庵小来れ若患は脱る法と授けり
 のまの庵の姿とけり浪の庵より入りて夜



深更よ及て女の聲して沖庭をよるつらよの
わり野人きて水約束の事よと目か
と周るるまに罪の極と懺悔せしむらば女
尸うまを前世宿る村の某が妻女にわらうが生
得恨貪りして常小嗔意さんなり信尼はを
を仇のぞく思ひ又姫女泣いて婢妾のこめがよ
おいて眩のほひ胸よめえく心望まふよなく其
お日く夜くの念を悪業つらめりて是もきこま
ば業因ふりけりたまふと蛇の報と受け水
中にはけりけりけり熱の焔上焦るまに鱗の内よ

百子の毒虫わりて肌と心車及はを刺りも甚
し竹ぎ頭とち解ふの若患は散たすこと清江
ゆ候しと才と心車を若痛と眼前よ入るがめり
野人園をよかちら血脈は封ドのよして更ら海
しつげ海底の沈女も佛の教は行交して
即ちと成佛し摩羯大魚のかち候しと三室
の沖を以て暴風は改より今與ふる血
脈は化りしと如來百種の名号と海は法界か
り心もつく行交して教力派れしとて必畜養
免らぬしとてぬぐ祓七ごろよ教化してゆきり

その後、後醍醐天皇もかくして彼國の大蛇死して、
浮くたりと、沙汰をなすと、
前の大蛇死し、
凍えと云血脈が、
わたりぬる大蛇村の人と、
に埋く三日、
又圓の法人、
りて、
とる事、
蛇りり三熱の、

かう終を、
既免を、
淨土に、
ふ小、
これ、

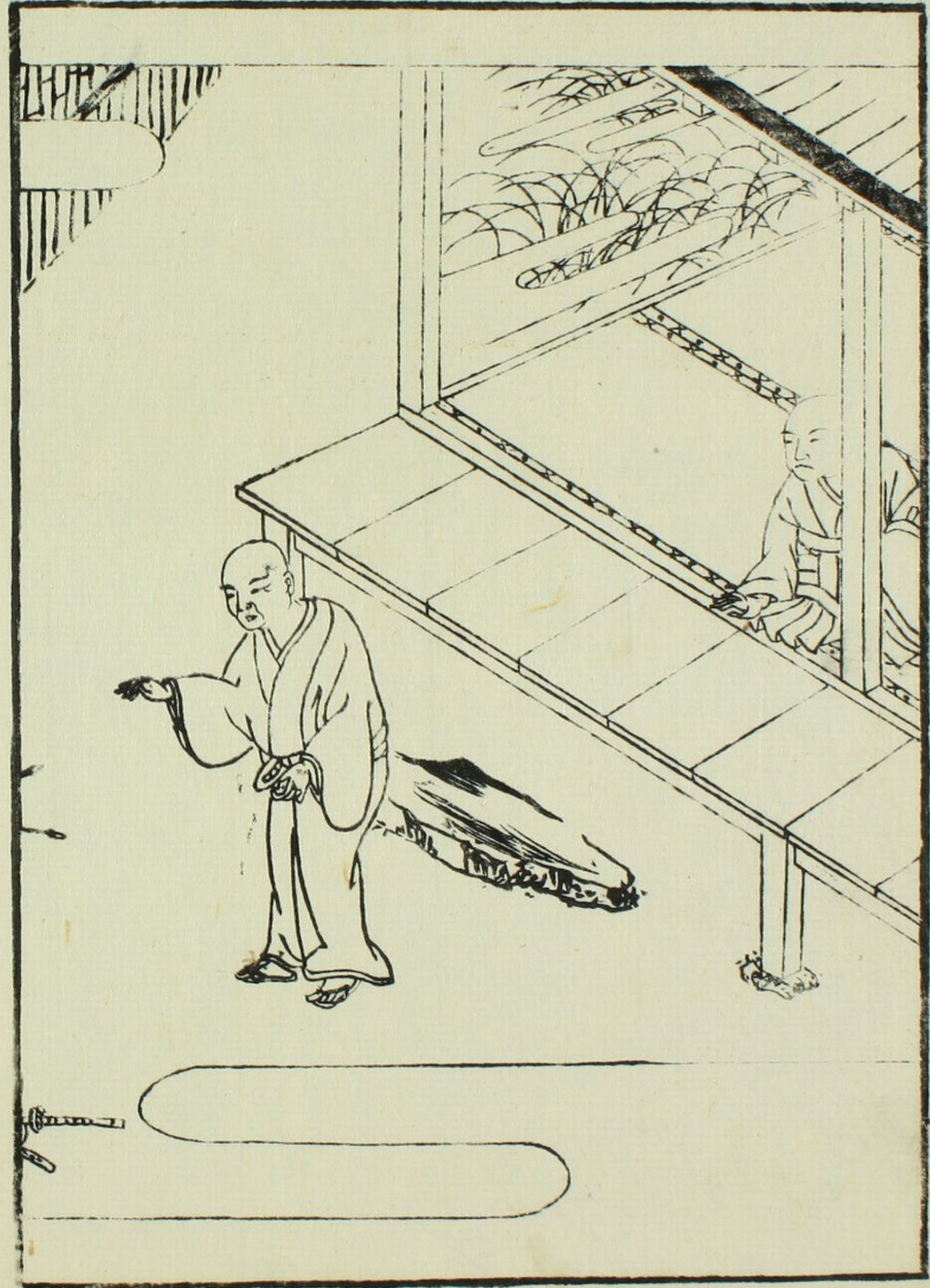
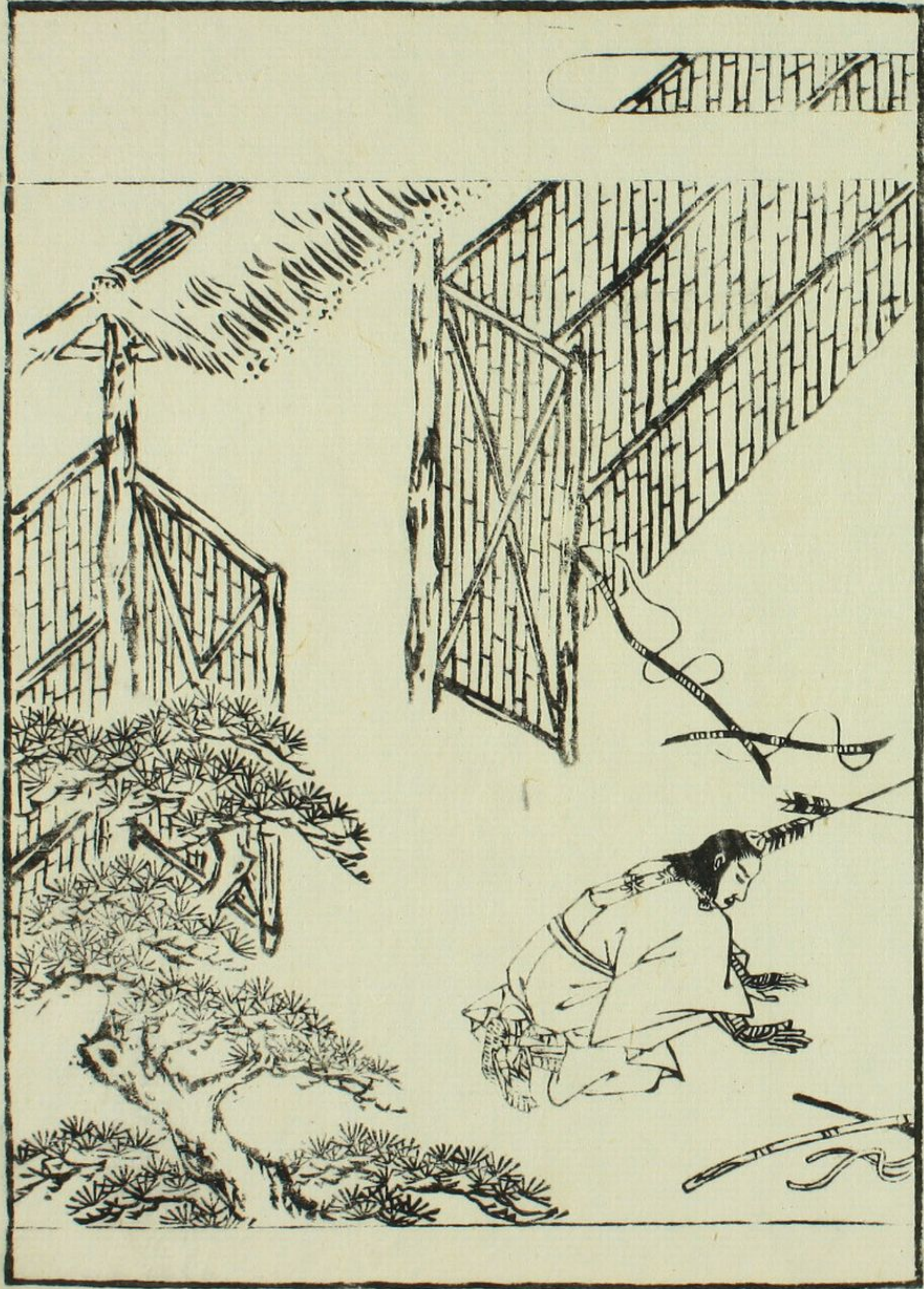


聖人一こそ孝隆國必府柿園号以沖教
 化わりて板敷山の浪汰往來したまふ時同國
 とふ村又梅庵と名園より又験考あり
 日來聖人の教化と移さく何とぞして
 聖人と書さんと彼山浪と思ひ聖人の性
 返したまふ浪同りよ度こよ乃びて幸は
 こげと信との梅浪考うたむ奇異の可い
 わりいざや聖人の福見して名を浪とんを
 一とせひいていゝあ〜くろ兼兵杖浪帯一
 稲田の祿坊と録りて業内と所産室よ

辰人命より沖弟子進鷲このぎて日來聞
 え一曲者こそ推系一ゆき先吾侍か
 向いて同名と名一かどか〜あまい合浪聖人
 聞り〜さうぐ事か〜我とよ仔細あり〜そ
 突汰〜と離衣素浪〜そ左右〜か〜
 たまひぬ教園〜教と向よ〜と〜り大人
 智者の相〜と〜聖人〜と〜たらすらゆ
 依濁位〜の〜害心〜速〜に消〜と〜
 又〜は〜伏〜て〜件〜の〜子〜浪〜の〜小〜聖〜人〜聊〜も〜鷲
 たまふ色〜と〜減〜と〜入〜の〜好〜身〜子〜浪〜得〜事

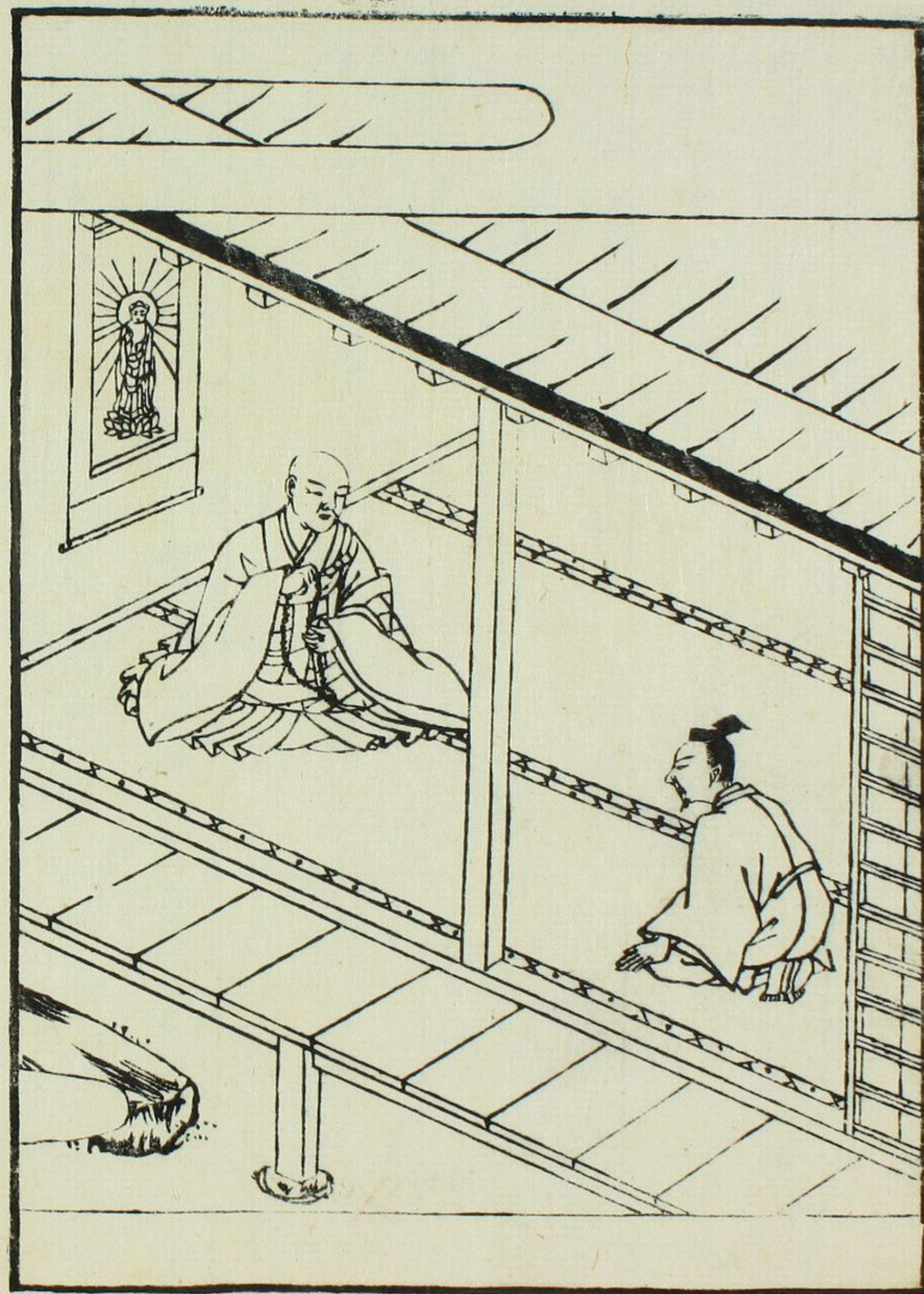
あふんとしおりのひけり果して沖房を楚来
 りとけりしや沖衣の色見えたりぬを各園
 思へく是ぞ生方の如來なりしと立地よ
 引去衣折刀杖衣とて柿衣衣ぬぞ改
 悔深注して沖衣子とかなり各園注て
 しく共今すぞの名と邪見造悪の身
 の名ふとばおれさへりよせくおのひゆり
 新よ入佛道の名衣賜らばしと聖人其
 少くも志誠感とたすんひ明法房澄信
 と授ら久急部橋原とらふ所よ修りが

聖人よ先づらてりぞ度性生衣るが小
 あり



ある時麻鴉行方の辺に化しぬ與澤より入里より
りよと枝田と八郎と云鹿氏より野介よお逆て
根糸が毒さす少くは産難よりりて身まらぬ前
業や掃りらんうかもやご己魂夜毎来り泣
ぶ事とさすく日毎追ひ追ひはるいども其
路や願く沖急悲と意て収が若悲は救ふと
泣くりり聖人圃に受十方无母の光明の
亦もく救ざる罪も外してさから果が家よ入
りい磔石に集て之故大衆の妙典は書かの
亡女が塚よこまは埋して三日は砂して吊り入

頼二町の夜長田いさご眠りざりよ件の女もろり
くきき妻は現下頼よえわり聖人よ向て
殺して日明師の吊り依て速に血を色とおて極楽
よ往せよとよが身は粉や骨は碎もいざり
身因は報せんやと又家人よ告ていさく世師の
生方のめ来りり油ボよあよゆく報恩は是
ご云ととりて紙のごく若後とて消去ぬ一
家社も持て見て大に位作し依日くあわつ
る人聖人志のゆりさ感ト多入繪像
を跡はは賜りり



五十二歳元仁元年甲申正月十日より福田の
 夏より夏行に代は書撰より始は十八歳
 夏の以より系業ありしりどもこころかこ抜書の
 体なりし今年の初春より巻紙六部に分ら
 前後始終は書調より然ども法書ハ六十
 六歳の秋なり
 嘉祿元年乙酉正月八日下野國芳賀郡大内庄柳
 嶋より西に往りし日既よ暮ぬ人家をくく若草
 野の中よりやらの年ふあり野人を逢ふふく
 たりて念佛して明くりし明星さまふおんと

ともくもやたらまら一人の天童くおぼしきこの
 来りもた天條の柳枝と白妙の包おとり東
 西に盤桓して遠て曰
 白鷺の池乃みざりた一夜の柳枝青し
 般舟の髻乃みかたんと佛生國の輝きぬ
 如氷志むく吟とせ此よ向て去んぬ野人問て
 言く童子と何人ぞ何の故よりん詠吟
 ともくもやて云我ハこそ明星天子本地極樂
 の野荒虚空苑善薩なり師よ伽藍を靈地
 以ふらんぬふくに來りしとてとから南方の

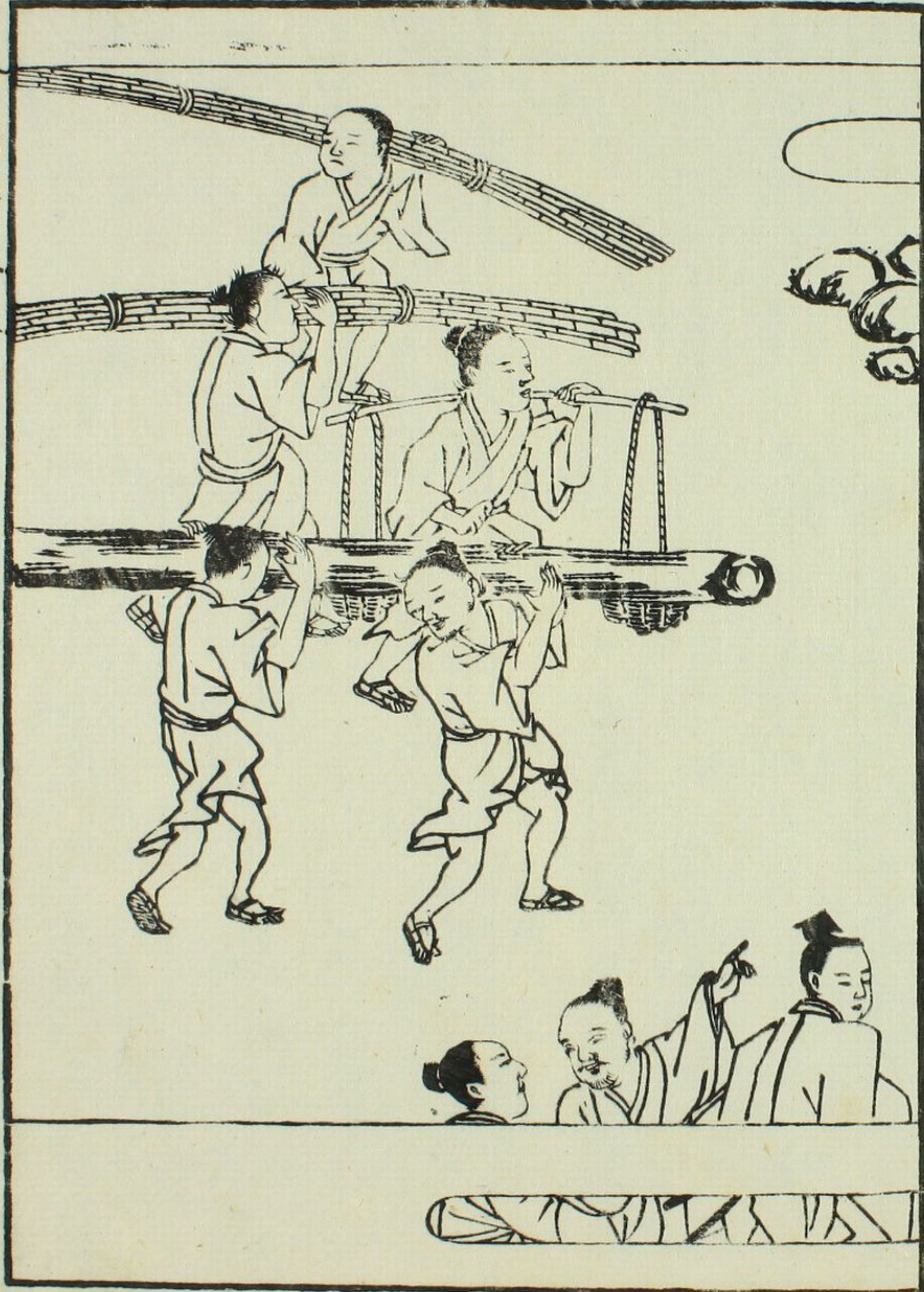
水田派指て曰作日域の中又在佛の野跡如
 之輪親自在靈應の地三所あり一者洛陽
 六角社舎の地是を法佛轉法輪の靈所
 如之輪親自在鎮辰の芳趾なり二者栴州
 摩尼宝の冢是往昔迦葉如來所行方生
 の地如意親施之畏應現の山あり三者野州柳
 鳴の地是昔釋迦文佛遊止說法の靈地也
 輪親也音如來の教勅と文て方便利生に
 した梵區也師早く伽藍と建之してこの二樹
 瓜庭石小極よけ柳と月氏白鷺泥の柳なり

以樹子ハ佛生國の菩提子也と仲の二樹と
 聖人よ授く野人言く童子の泣疑ふる人
 死た地を緑水泥土の也也何しと伽藍
 の地とがんとく其時童子泣くと也又水中
 有り云ぬ



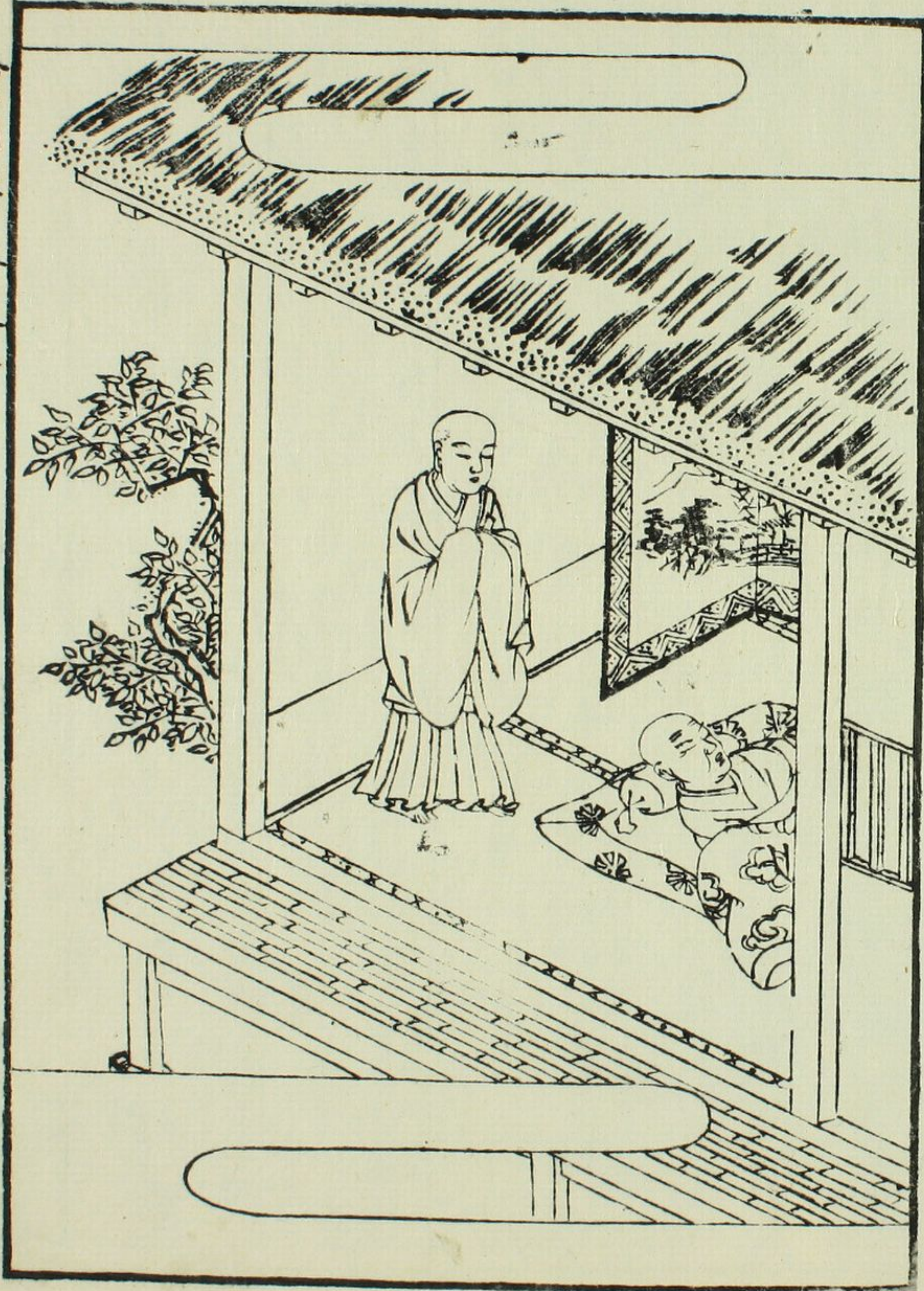
聖人試み柳枝水田の涯ふり喜提子と平
石の南に極又石をよゆりて多佛之味して師
すもた天の小乃てこまは見えれど柳と喜提子
一夜に生長より事二丈餘ふりて枝葉四方ふ
布に又涌水に渠に流し中央凸出とて高田の
地盤くちまより是より社地と名て高田と称
す時小の奇場と見聞の道俗に伏驚歎して
師を付ふかぬ機縁とぞふるも早く伽藍法
造建して一宗の本基とせんとも勤め人の聖
人のことなり我願がけいすごとくふる所なり

一、身等も志願志すばな拒武天皇の苗裔法
府將軍平國香の流胤大内國時と下野の國
司と真國の城も也代りた美子なりりくまは合
才夫發の國春よ小司氏譲り次の合身大内國
初と家督よ立て自身へ高村よ居任わつりごと
の奇物と見て聖人とも教あり事世々の如し
國て大内氏發小乘相馬の家の一族は傳り來
りて大石氏とて竹本氏發とてや小梵宇
高建之の奇術あり役吏雲霞のこく集
日本石山の如く棲り



加之常陸下野の諸家亦下総陸奥の諸人亦雲
 後等々あると分て有りはゞいへば小件の地は境い
 んく質堅く有りて水の廣野と相合はるり誠
 又承忠議の事有り是偏又師の言徳佛天相
 感をも極化利生と助くるの方便九識の測る
 取らゆゑなるもの也かの國討は皈依渴作のわまり
 指田多し程も遠くして自ら辰佐の五村のあり川
 堀り假りり多危沢設てよりく聖人と相違
 して相着流をせよ是より居て自らも流
 して二心なき沖流子と成りて高田入道教と

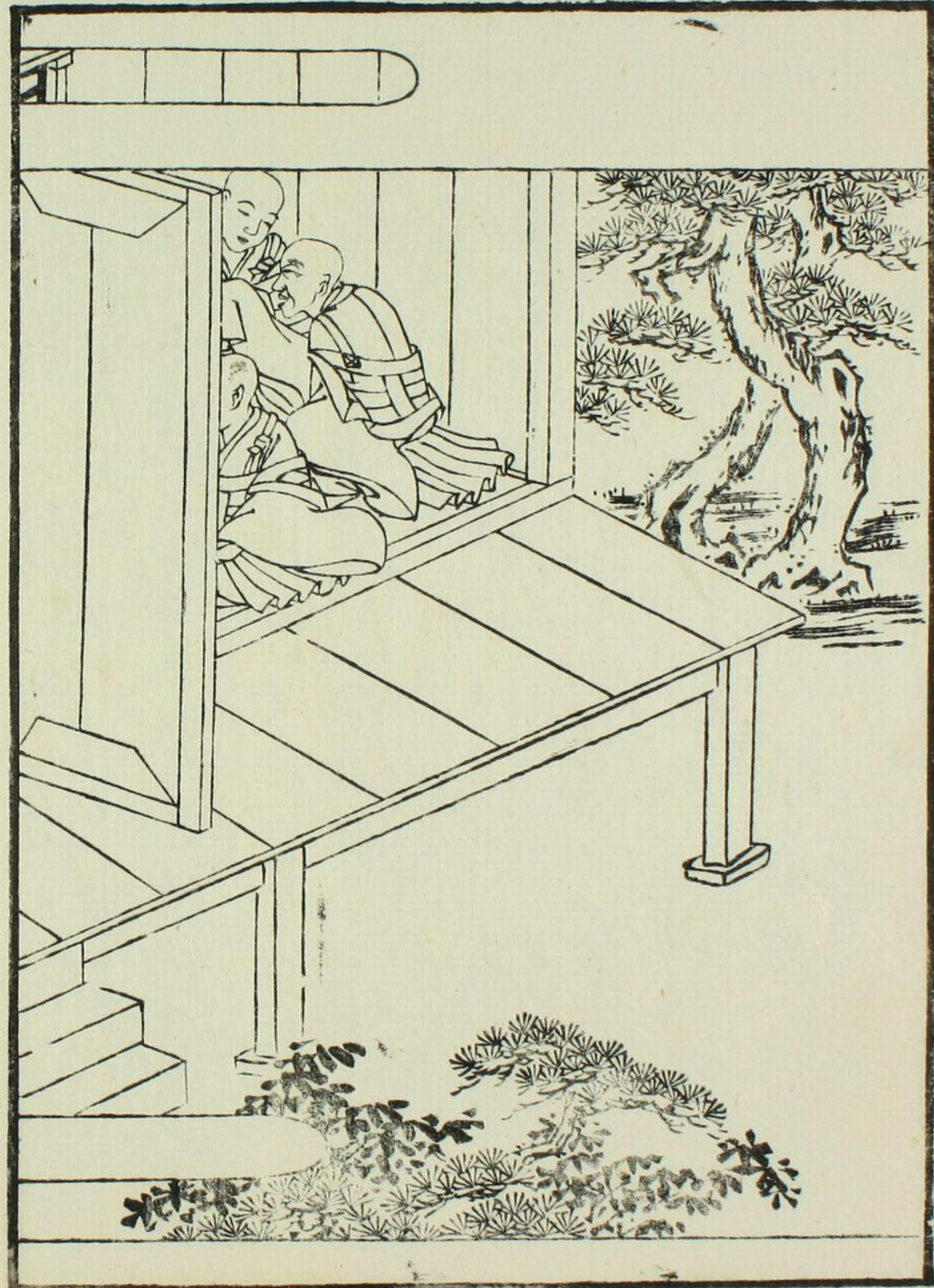
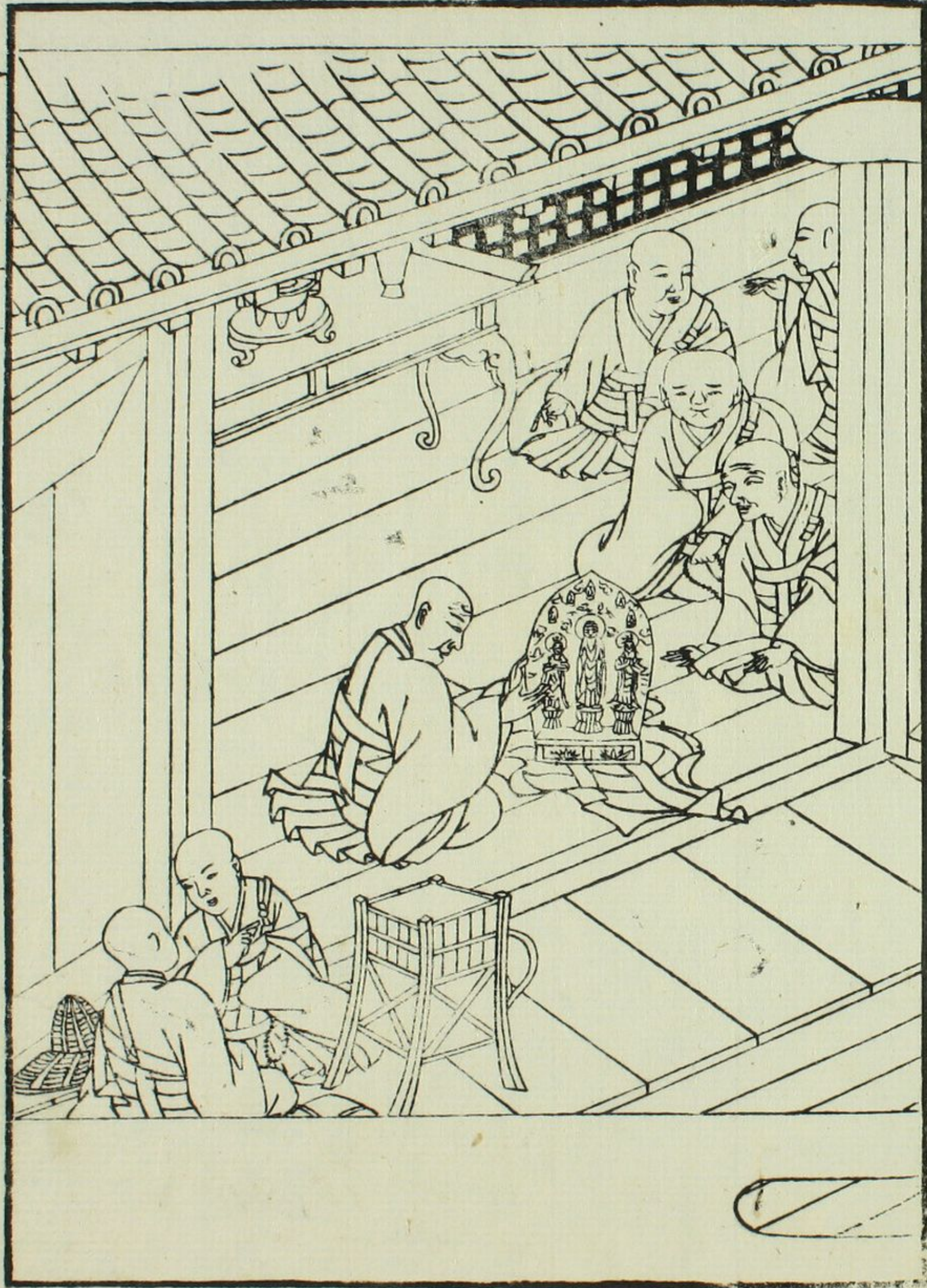
トハ思ひたり亦ハ大内禪園教もトク
 同年四月野人五村の多危おまきりり
 十曾の夜乃河原一人の化僧来りて言く師の
 顔もがた満足せり速小信濃國吾走守小来
 り下我亦分て汝も與ふぞ早く伽藍と
 建て奉るるや一渡季の紋流も世系一連代
 の流生流引守とて一と云終るある方へ去
 高田の地少く忽ち消ぬし句ひて是らた
 申しぬ野人欽直斜やんといへば信長
 赴り人折しも横曾根乃性信房藤崎



の順じゆんにしん房ぶどうなりなり念ねんせせてて供ぐ奉ぶせせられられり

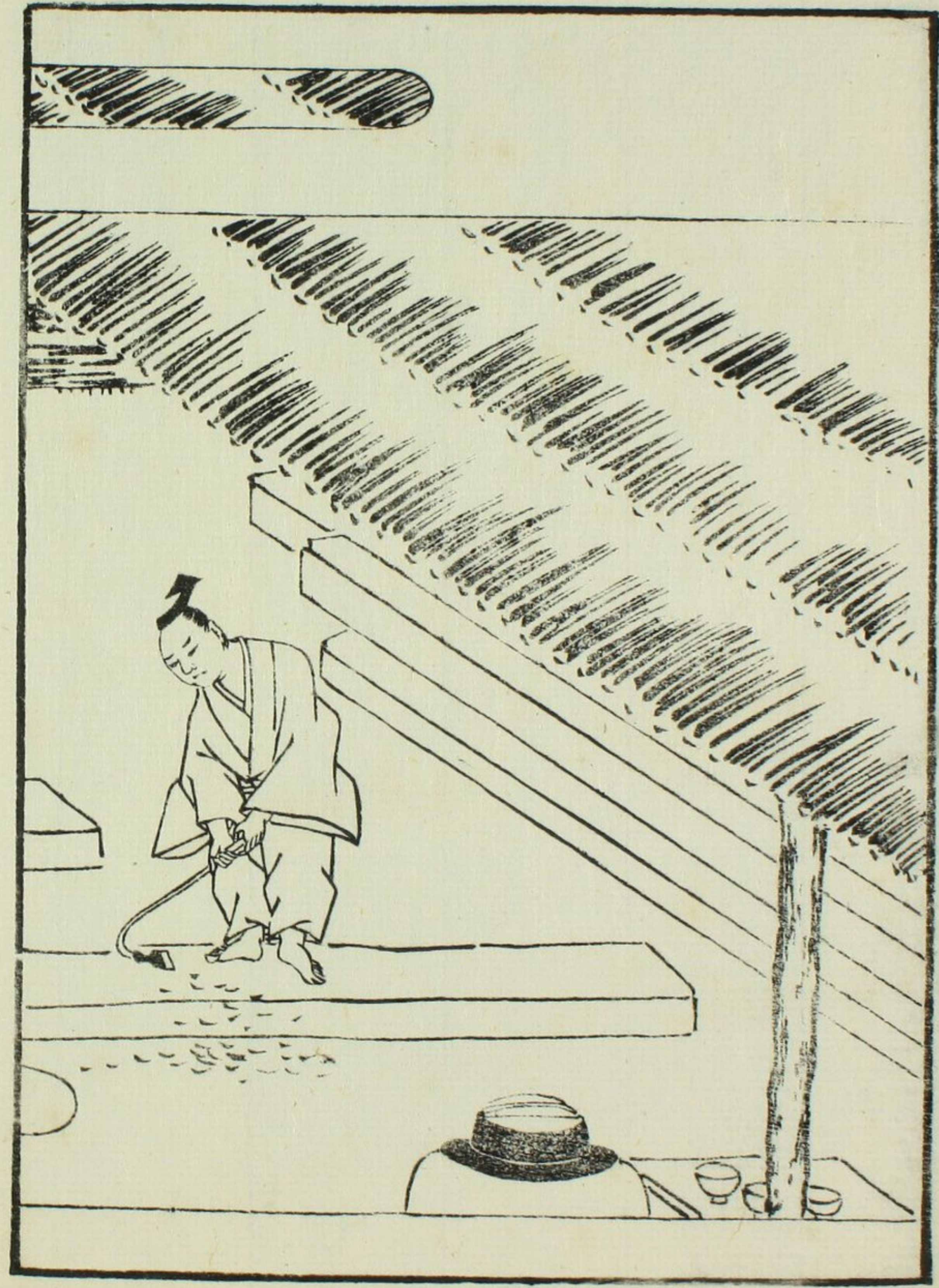
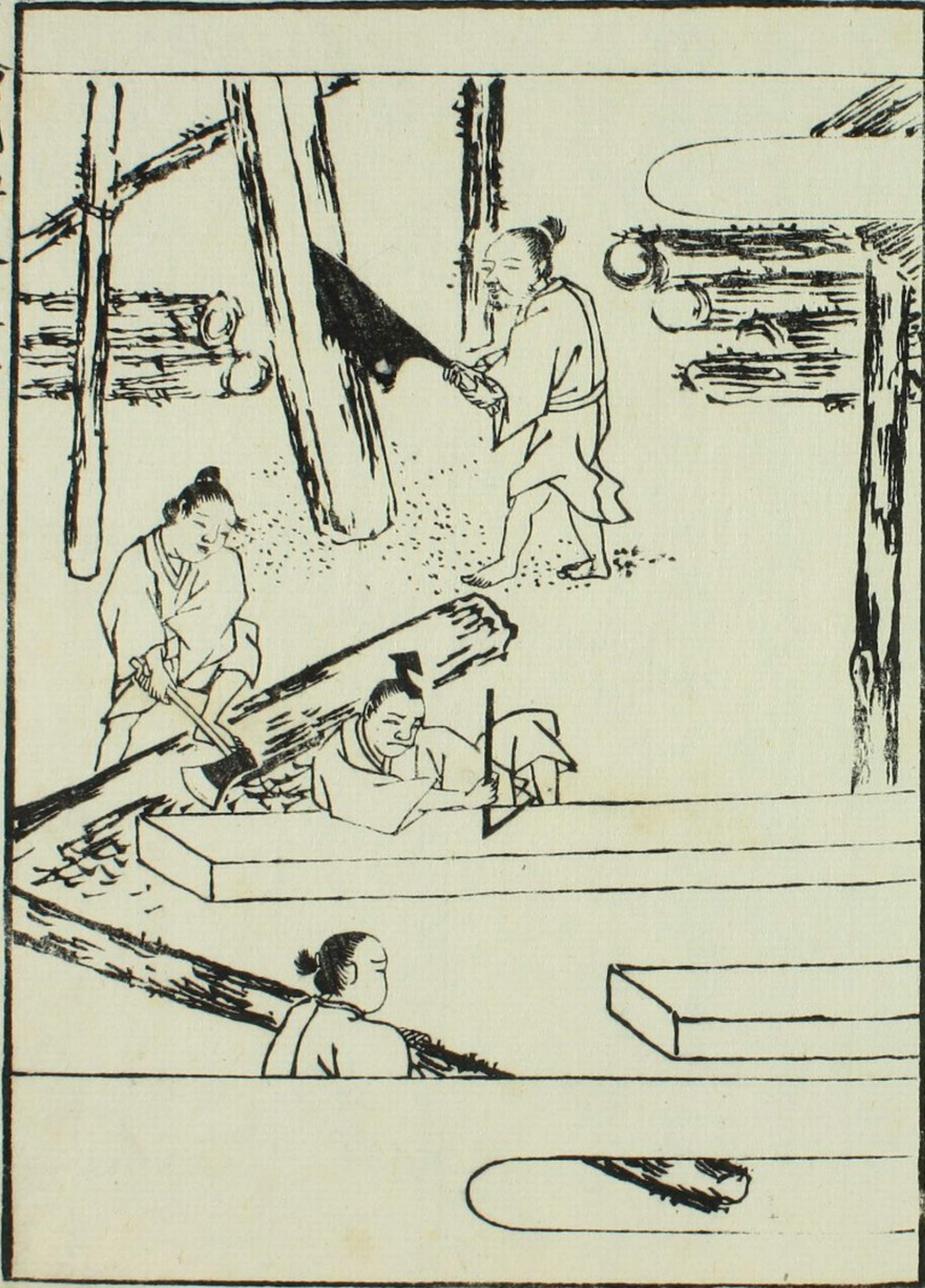
日十九日早朝小如未堂より参上志より於る
 彼寺にも靈告ありて同寺に感ぜざる僧十
 五人まで有り行集會の御名長中乃
 若氏詣りて去るを檀ふ分弟の係すませ
 ばいふ不思儀の思ひ返りたり一人参入
 有りて僧大下驚歎し靈告に於り佛勅
 なまばりともつら三尊の令像は涙奉
 まり聖人御表の涙は咽び袈裟より發
 せし是自ら負てゆり順行房村信房から
 ける扶助人を近の人とこそと聞て縁

の乃ん術又寒り道よ溢きて感泣して好
 しかり日亦六日の暮れにびてる田より
 たまひぬ



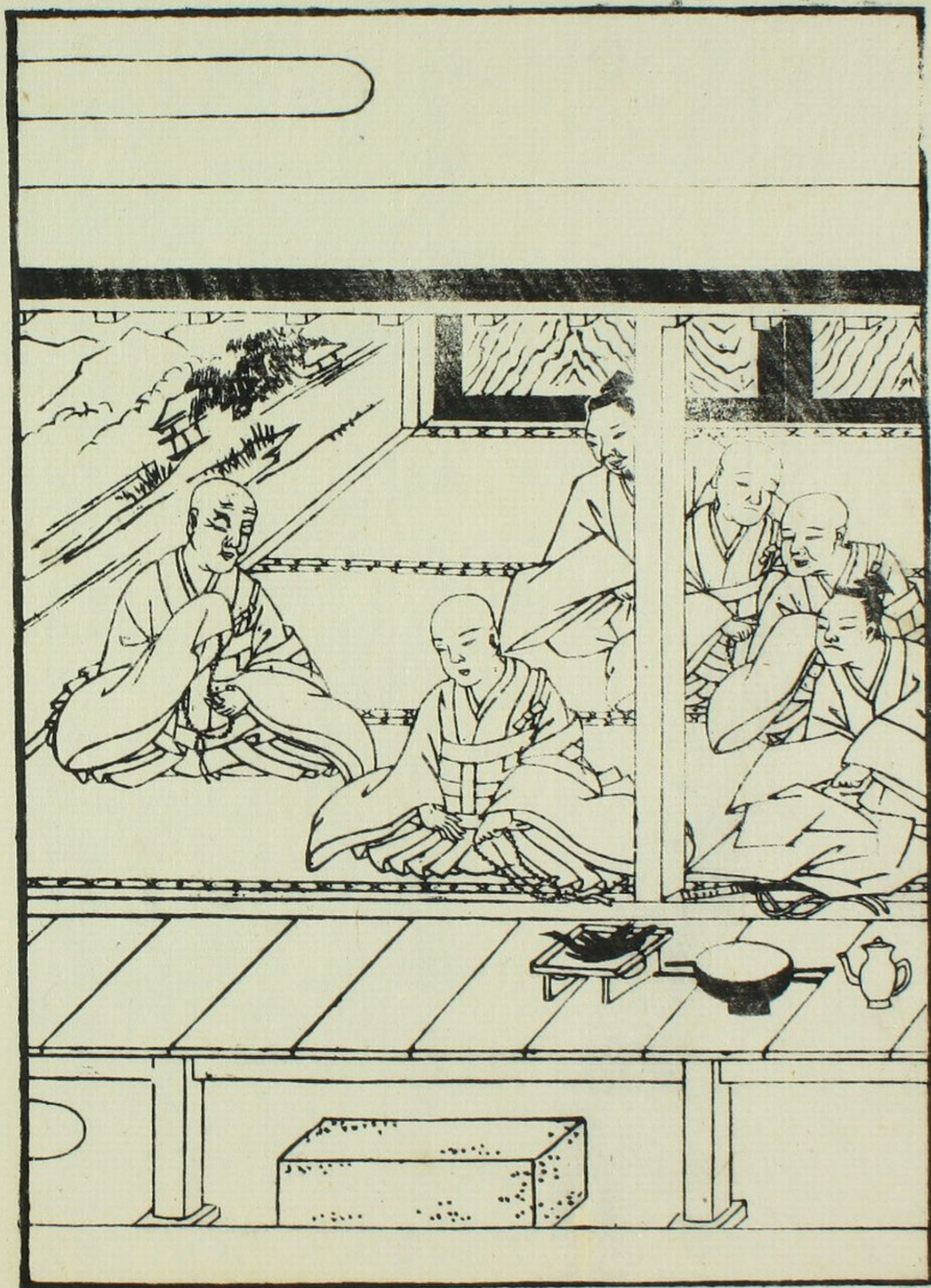
時よま國城之主大内國行久下田を所考方この靈異と
 作て野人よ事と色々小栗城之主平尚家其靈城と
 大夫判官國春相馬城之主松平高貞平塚元
 司源次郎重連其同松平基貞其の
 日と遊て糸詣一法化よわらる事奉てかよは
 べせもく野人初て下喜よ下向りてより
 以素道俗男女の紫門下よわらる事よもい
 國守大家のゆ依りてよりくも打をてより
 事形より今よてんお國の事家名湯作の
 首は似けて紫教日々に學りれば麻機のは熟

時よふ事り救世善後の懸記よこの事
 まりてて少く欽表しりて
 日廿八日より造臺の之始て芥坂めぐ下は棟梁の
 大乙の青國守都宮廣田大膳満心小乙の志國
 若本松助忠安より其外數通一百餘人せ
 云



大内國春の嫡男権を推尾津之守春時と
 申し初年の時り善徳公よりしてりく聖人乃
 禅坊小つわり友示と交りてか加祿元年乙
 酉七月廿日又國春逝去せりく久遠家と傳
 志堅の城主と成りて代りても名志守と成りて
 逐小果代乃武官に合身四年國徳に譲り其
 年の十月四日聖人に招給り出家せし事伝乞
 たまふ聖人のつとむるも及不願しれりて
 か及ぶに戒師と成りて難津せりゆ沖茅子と
 成りてりく聖人宣く人の入道と成りてりく
 成りてりく

又後とて弟のりり所りく又の妻妻愛子と先
 だてく嘆のりりりり夜に津津るりりり
 敏の世もめでたく沖年といまはと壯少と
 してかく佛道入りの其の佛やとていりりか
 くとおりいぬむしそ法名と名佛とを授た
 たりりり聖人五十三歳高佛といまはと十七歳の
 沖時りり後小聖人の命小りりてりり白の任職と
 かりたまふりりり傳梵二世の大君如徳か
 王



嘉祿二年正月よりて田の伽藍漸成然及
 人々をよきなりて其佛殿御名代
 浴びる周濟黄門とて奏達行り
 勅額寺の繪自反下る

專修阿彌陀寺

直奉新天長地久之由依 天氣如斯

嘉祿二年二月十九日

と云々
 月半四日之旬令堂影堂に門築比外廊等こ
 しぐく成然一平ぬまふらかの柳樹菩提樹

と佛殿乃庵在る後極

廊内北城四方九丈 築比之内四方十二丈

金堂 縦横九丈二尺 善光寺感得如来安置と

歇堂 縦横七丈八尺 聖人自刻佛像安置と

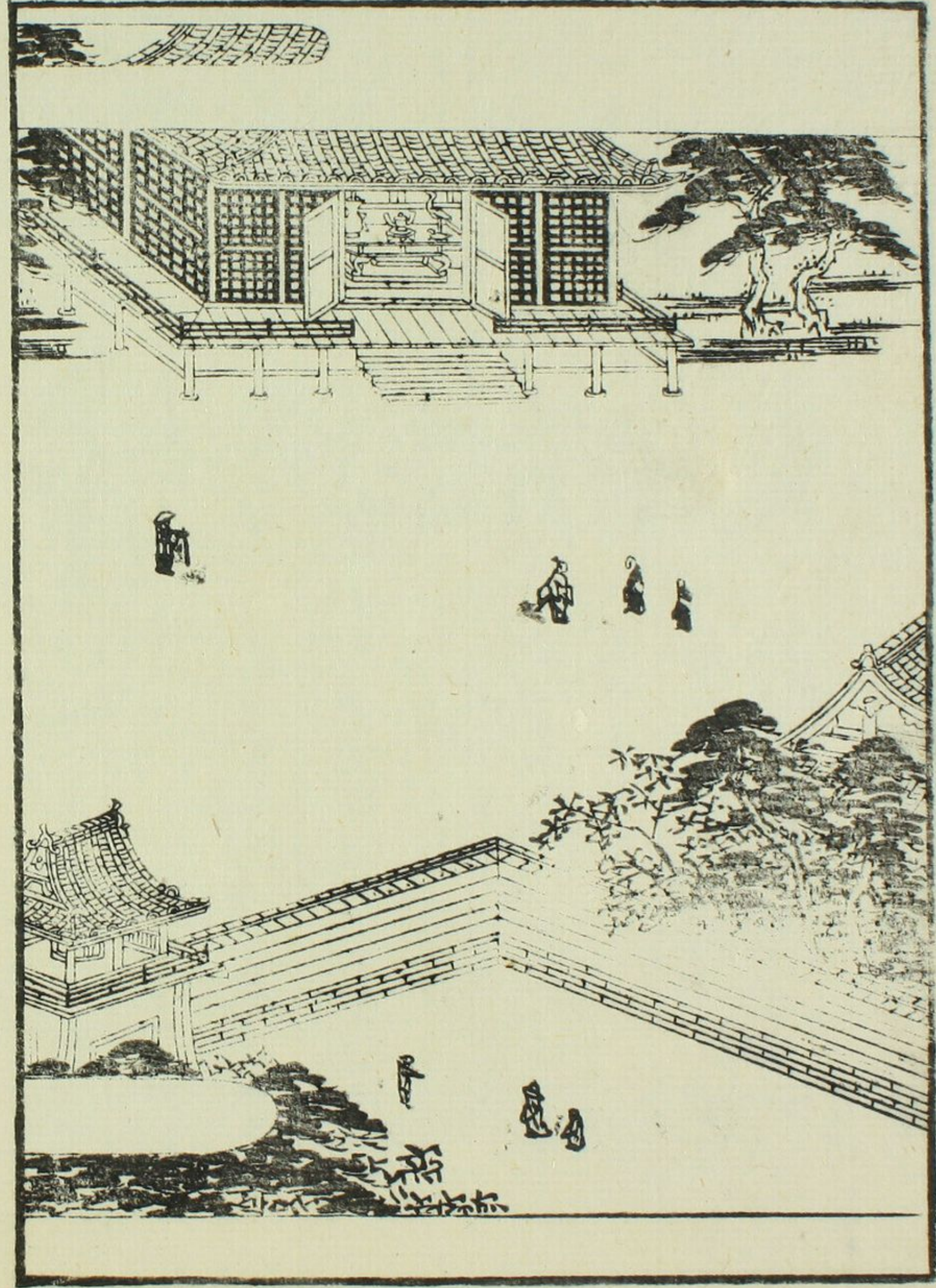
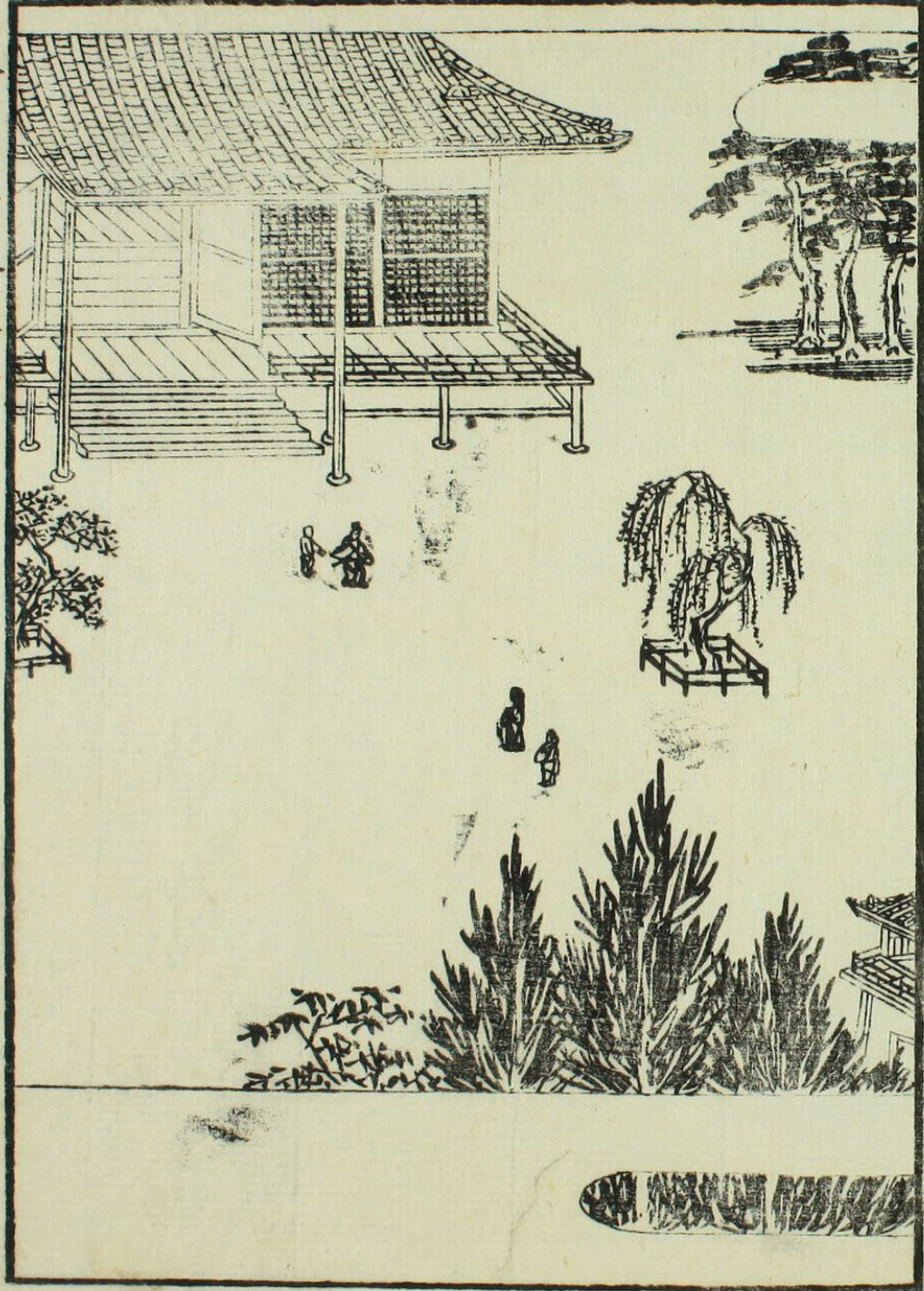
南大門 勅額 專修寺

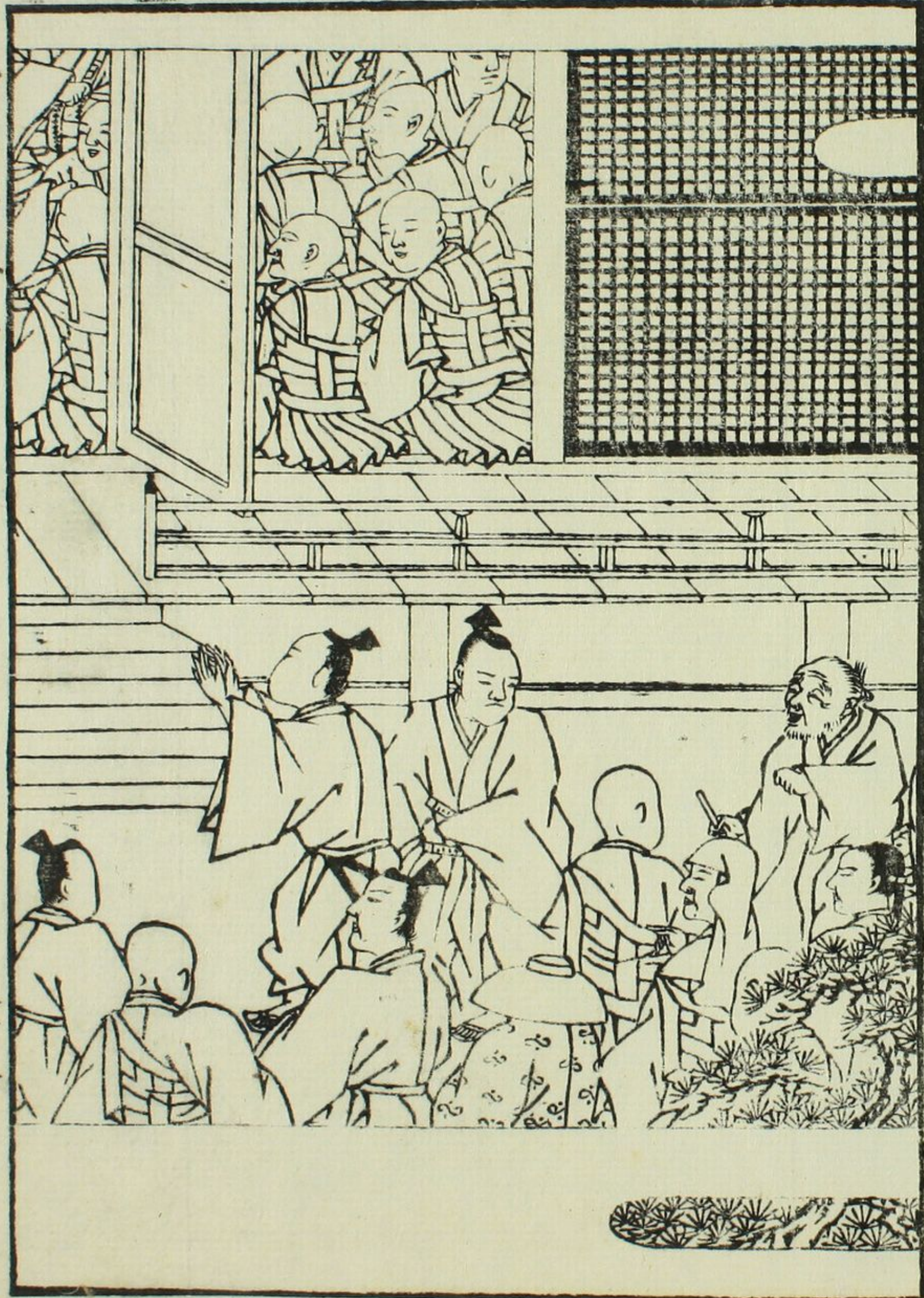
西大門 勅額 阿彌陀寺

東大門 自願 太子寺

北大門 自願 無量壽寺

廊南門 自願 高田山





同月中旬いんげんげん至いた日ひ慶けい禮れい供く養やうのりまま佛ぶつ房ぼう下したの
 沖おき子こ八は人にん派はととぐぐ由よし大だい門もんより決き定ていとと巡めぐ
 拜まゐり七しちヶ日にち法ほふ事じ執しつ行ぎやうとて九く日にち午うま刻くわく迄いたり
 也なり此こゝ時とき自より化け國こくの領りやうとと田でん入に道どう國こく時ときをを國こく城じやう主しゆ
 國こく行ぎやう久く下げ田たをを帝てい秀しゆ方かた志し堅けん城じやう之の國こく網あみ小せう桑そう城じやう
 之の高たか家け相あひ馬ま城じやう之の高たか負ふ足あし間ま底そこ司し基き負ふ平へい塚つか
 底そこ司し源げん治ぢ帝てい重じゆう連れん等らう等らう信しん仰ぎやうりりとと外あひ法ほふ國こく乃なり
 門かど身み自より餘あまの道どう俗ぞく男おとこ女をんな貴き賤せんととやや親おや誅しつと
 かく群ぐん詣ぎとと事こと昭あきら小せう條じょうり野のと道みちととり
 九く日にち法ほふ頭づかひの日ひ自より化け國こくの地ぢ頭づかひ在ありり門かど身み乃なり

八人會はつにんかい談だん連れん署しよとと當あつ寺し派はとと聖せい人にん一いつ流りゆう
 の本ほん寺しと相あひ定ていめ水みづ田でん十二じふに町ちやう山さん林りん七しち町ちやう派は附つ
 て寺しの永えい財さいととん
 同どう年ねん七しち月げつ東とう大だい門もんの内うち小せう左さ子し堂だう派は建けん小せうの
 らと宮みや白しろ皇かうの尊そん像ざう派は殿てん刻くわくとと安あん置ちとと
 たまたまり又また明めい星せい天てん子しの社しゃと伽が藍らんの南なんり
 互たがひて寺し護ご神しんとと神かみ植うゑ神しん社しゃととりりく



野人あり時常陸國筑波ふよ訪でて尋しして旅
館又赤岩ありに其夜乃夢よ一人の童子
来ていしく我ハ昔山男解控現の使たり
師明日山下の三窟のうちの窟よ入る
かや代所用野人ト野人夢よめて不審
うよ昨日かの岩屋よ入る見ありよ二箇乃
全わり一はかまを造りて水一斗げり湛
たり一は決りて水なり一給わりて岩屋
の奥乃小穴より多の餓鬼出來り野人よ
仰て一屋り我ハ岩屋の安樂よあり一
時性貪放

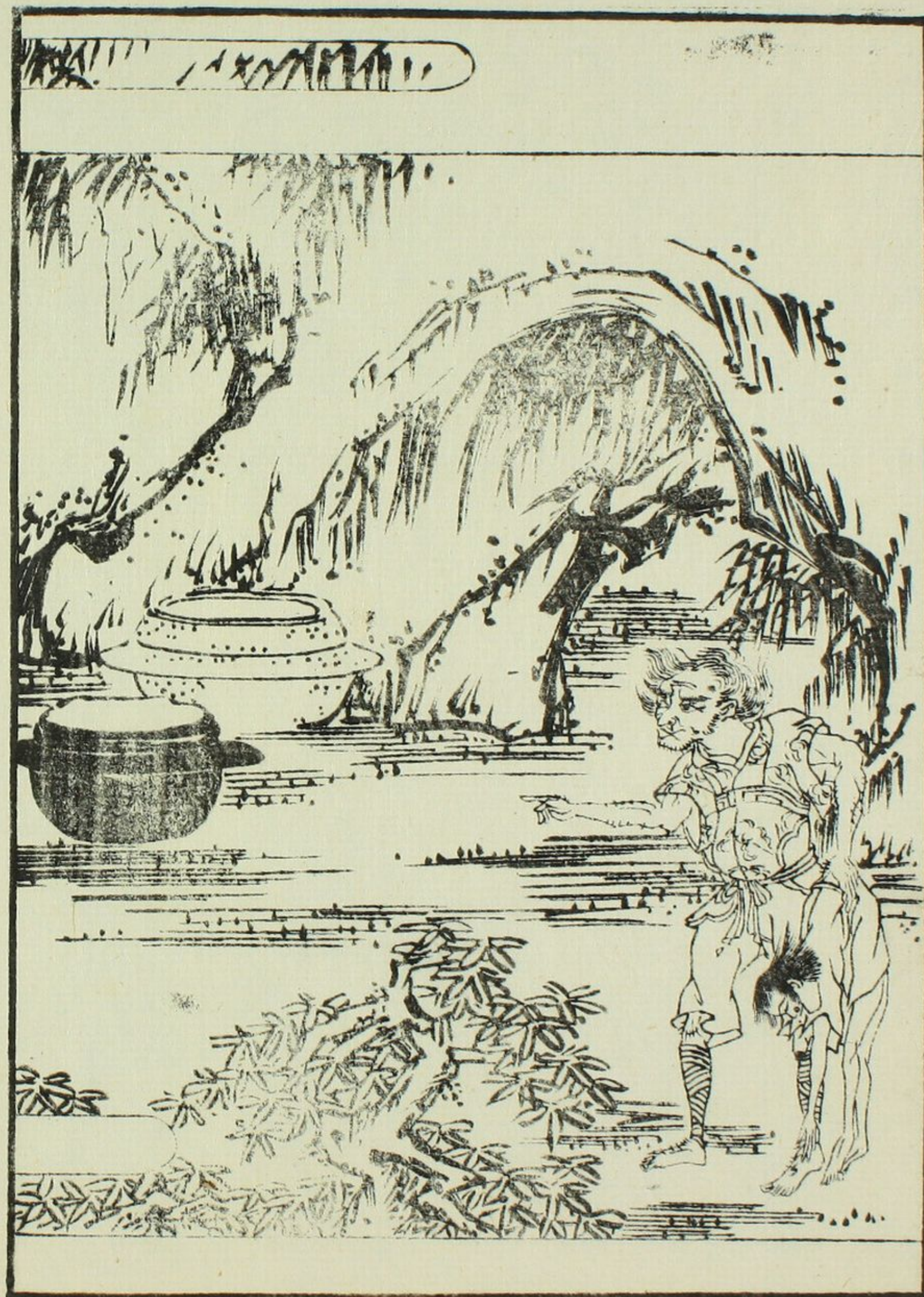
送の若しと候しつ報小因て今此餓鬼
趣小墜せり但一瓶波控現の氏子よるたよ
りく控現別の沖慈悲とよその窟の中り
垂て日毎よこの全水一漏づん興て食と
なまし心統るに昨夜控現の昔の室の明
師に來應り下かの教誡とよけて惡趣
孤脱しと移りてとよ師よの室長紙救た
すく野人の神衣よすまて注く辨よ登
人昨夜夏中の神使ハ社奉たりとより
りいてよかよら餓鬼小とよく宣く極

悪人無他方便唯祇陀得生極樂
て海鳥如之此者乃解脫祇陀得生車の偏小
を佛よわるとして祇陀の誓願
力にあり我ふとてして佛せよとて
日月も念佛も二日二夜小の聖
人誠鬼も同く念中水多し何ぞ一
日ふとて一滴飲やとて一滴の
より我多分なり二滴と嘗ての煩
かりて脱胎と焼ふの故よ吾ここのわさだ聖
人宜く今の身く事わとていんば
いんば

一と誠鬼もいんで二と飲と柳も隣
一と逐よと水ののそとぬ時外より一と
鬼もに印りの死に提くる其も是に
引きた散い水に飲むとて飲り念中小
水に彼鬼聖人眼ていとも僧何れよ
こにありやとて念水喝たるはいり
故ぞ吾人宜く水に我誠鬼よわとてのま
りて汝何ぞと念にさむや鬼云我のこの
蟻のまかり唯一滴の水に一鬼よわとて
食してむ故よ水のけとるは然む也

聖人宣く答るるにかりき汝も水と逐るる
 しこそ指現の方より向て持をきこまよふ
 たちすら水釜中より涌く故のこゝ鬼の
 不思議とて入て五体と地を投て云は師
 の生身は如来の如く是く久くは餓鬼
 の王領とて主者成るる事と飲食を
 乞ふくは日小く一たび成るる外は捨
 得て是れはくは能くつとて師の福が
 らくは我より始るる煙中の鬼は救た
 まくと血涙流してトク聖人とてかゝら

光明編照の文は誦じて是佛也其後
 五色の瑞雲わらはる若くは霞霞の社時煙中
 の法鬼神雲小童とてあ方より飛去りぬ
 如人



常陸國稲田口^{ひたちなかのくさひのちのち}に信心の老尼^{らうに}あり曾て身人の^{みんのかみ}
 変化^{へんげ}と^かうけ日く^ひ来り^きま^まえ^えて二公^{にこう}けり^り
 ころこの^{ころこの}以^もて人^{ひと}高田^{たかた}小^こま^まま^ませ^せば^ば拜^{らい}敷^しの^の
 う^うと^とま^まに^に悲^{かな}し^しく^くま^まて^てま^ま事^{こと}に^に嘆^{なげ}き^きう^うと^と聖^{せい}
 人^{にん}先^{せん}尼^にが^があ^あま^まい^い志^しに^に感^{かん}ト^トう^うん^ん一^{いつ}面^{めん}の^の鏡^{かがみ}と
 ころり^{ころり}て^てま^ま涌^ゆき^きう^うに^に新^{にい}像^{ざう}た^たら^らま^まり^りう^うり^りま
 て^て消^{しょう}ら^ら事^{こと}な^なし^しと^とま^まふ^ふら^らの^の先^{せん}尼^にに^に賜^{たま}ひ^ひけ
 ま^まば^ばた^たふ^ふら^らう^うび^びて^て安^{あん}重^{じゆう}し^しま^まる^る



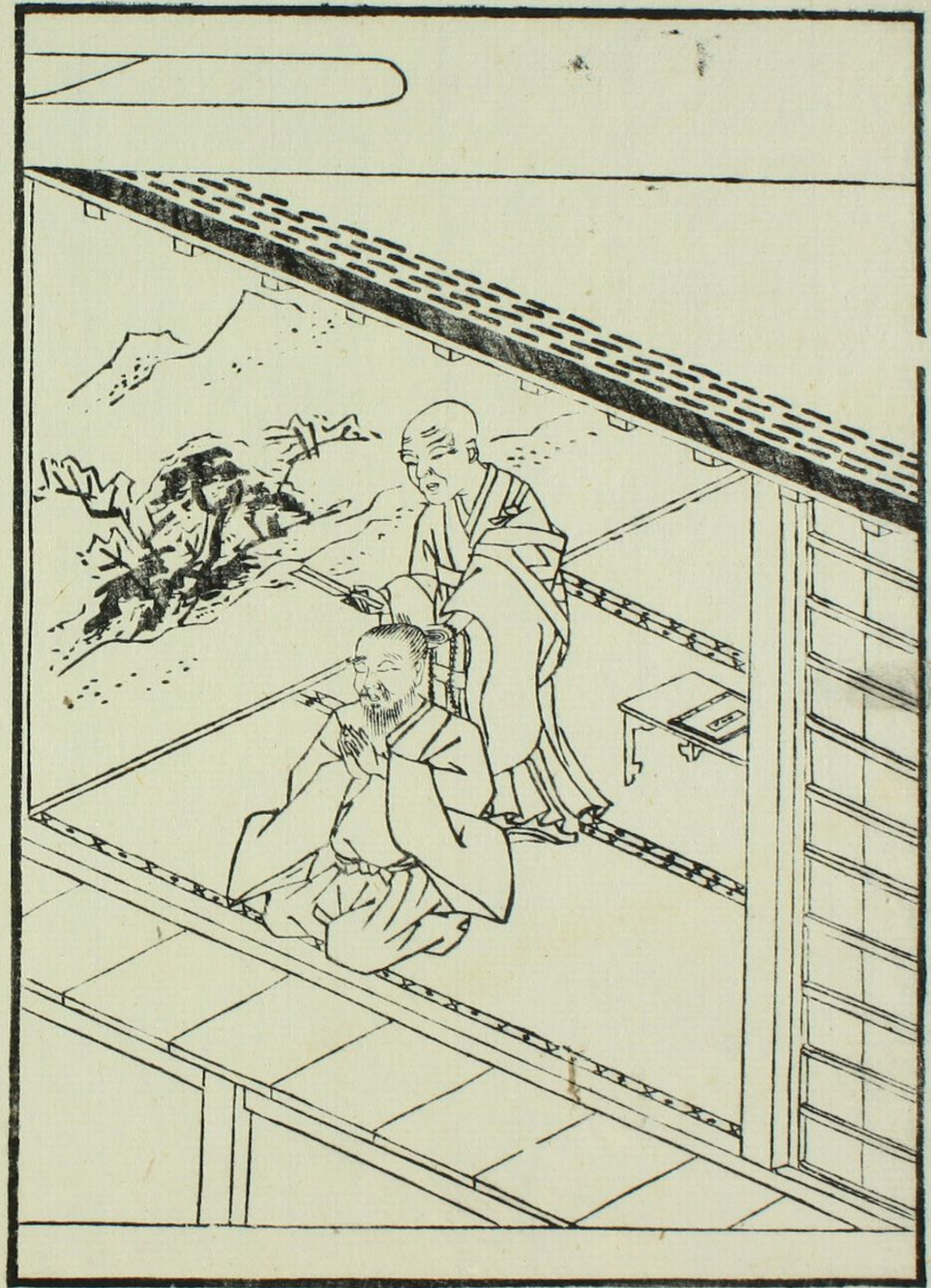
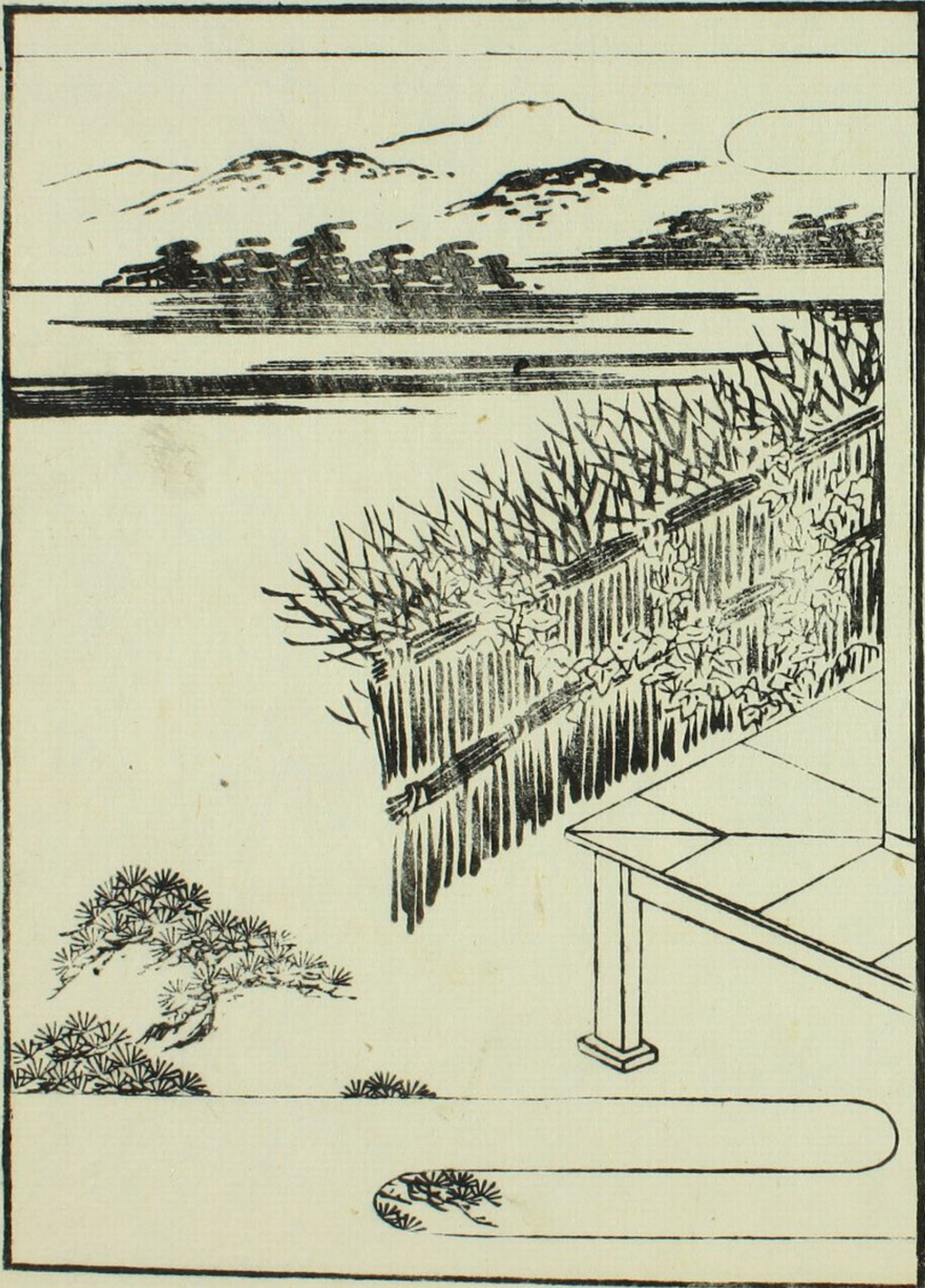
安負元丁亥某聖人常州震浦より
まよふ浦人申くそのご孫海中ふま
しき光おわり何なる出車少り修ん
聖人のわくく思ふに小のりふ二件の
光お漁人の徳小はとて破廻するれ
派えたまふべ金に志深段の本像なり
大ふ收び我より縁の佛也しそふら
よりてゆりたまひき
聖人五十六歳三月下野國高田ふましして
行信院の清書と通る秋九月より功年ぬ

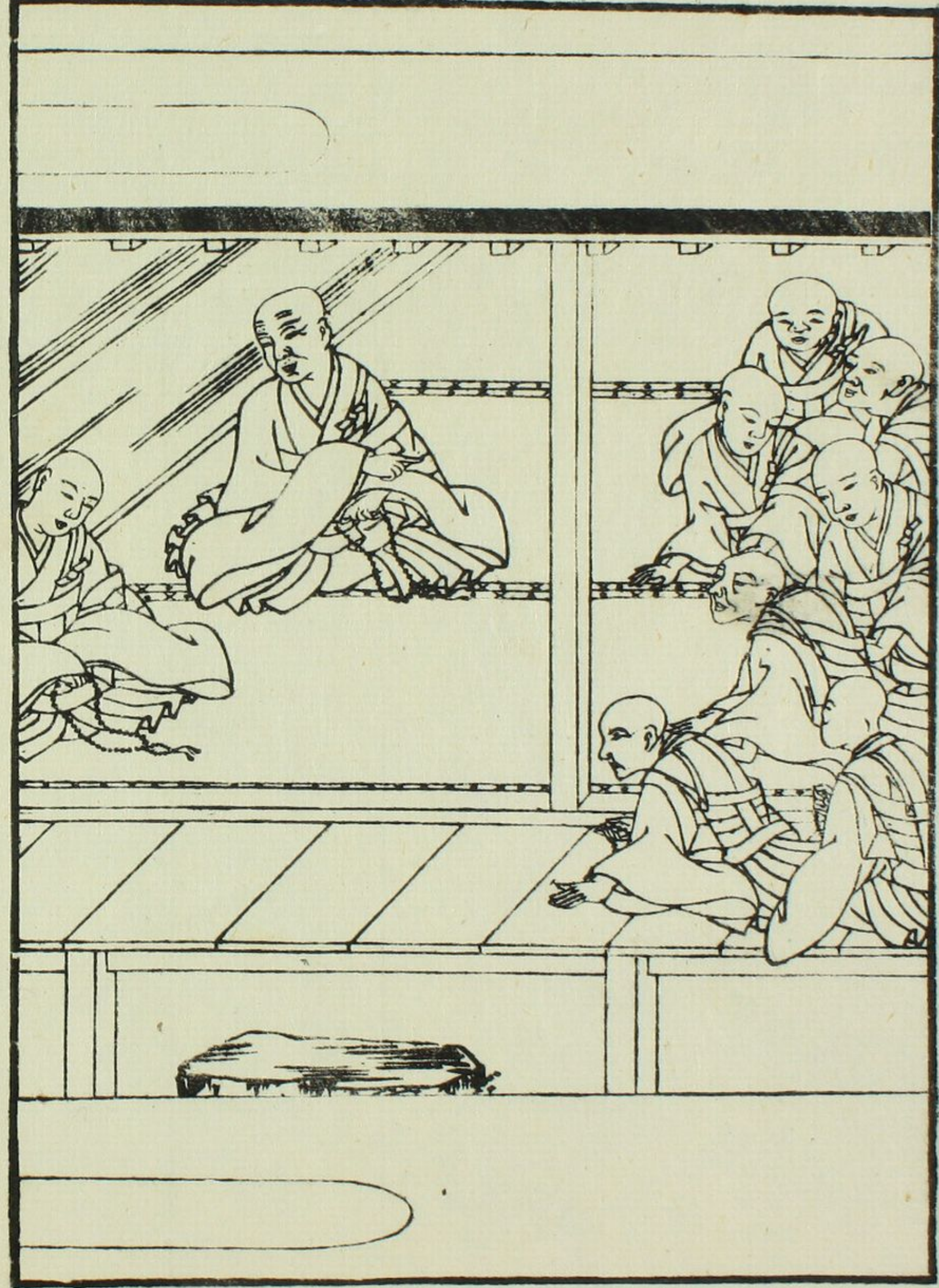
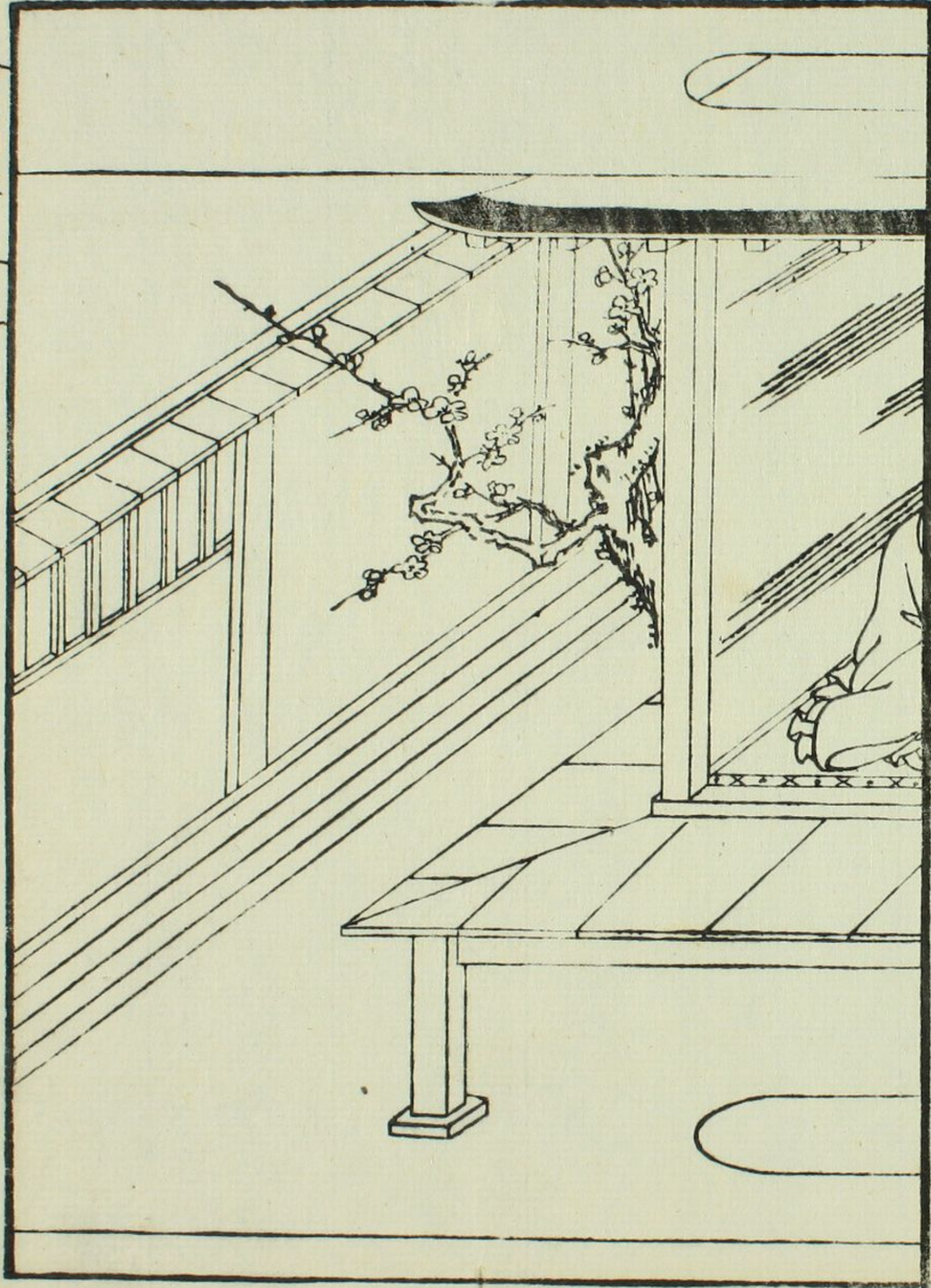
すしと歳年諸經要文派選りあり
同年五月越後國井東顯智房遠江國糸畑
專信房より田より於て聖人の御弟子となり
又專室房も御弟子となり是は六代國行乃
之男なり
寛喜元年七月聖人より由ふましして秋日説法
ありあり日白夜の老翁来りて戸庭うみ以明師
の法味派るをそ身かよりふたどが不願はま
首より御剃刀派わて法名と賜ふ志願満是より
身より人威容衰然して九人おんふまし



とふらら申したすて利刀にりて法名と信海と
書て授けし王老翁大ふりらるる頂戴する重
てしるくは日來の頑望今既し海是せるを何
紙をては武忠紙謝せん我くは紙司らる事わ
り神の法法の地よ於て今より藤水紙をんと約
して東南の方よをぬんくわく思ひて紙紙
あとい行ふ麻鳩の神籙入ぬく是てその跡と見
矣一り後況神神教と用くわく小件の法
名歴然くしてわらるる聖人の化導神明と通
じることのかくのどく最もお出儀の事なり

貞永元年 壬辰正月十六日 田の任持職
と真佛房の讓りより顯智專室以下八
人の門葉紙集て今日より志佛と以て我身
の代はん名其人と師通く作らるる聊も
師命よ遠より若ハ永く平が門人の北に作
後とより時小真佛二十四卷耳人六十卷の
沖付たり





同奉八月七日野人の高田派之出て華洛小赴り又
供奉八顯智房專信房伊達長元房飯沼性信房
只人なり夫佛之人專空房兩人も武元國名の派
まで送るる至相州足柄野江津と云ふ所まで來り
又行仰の道俗と云り不留り少りて六十二歳の
八月まで湯と止て教にまじりて

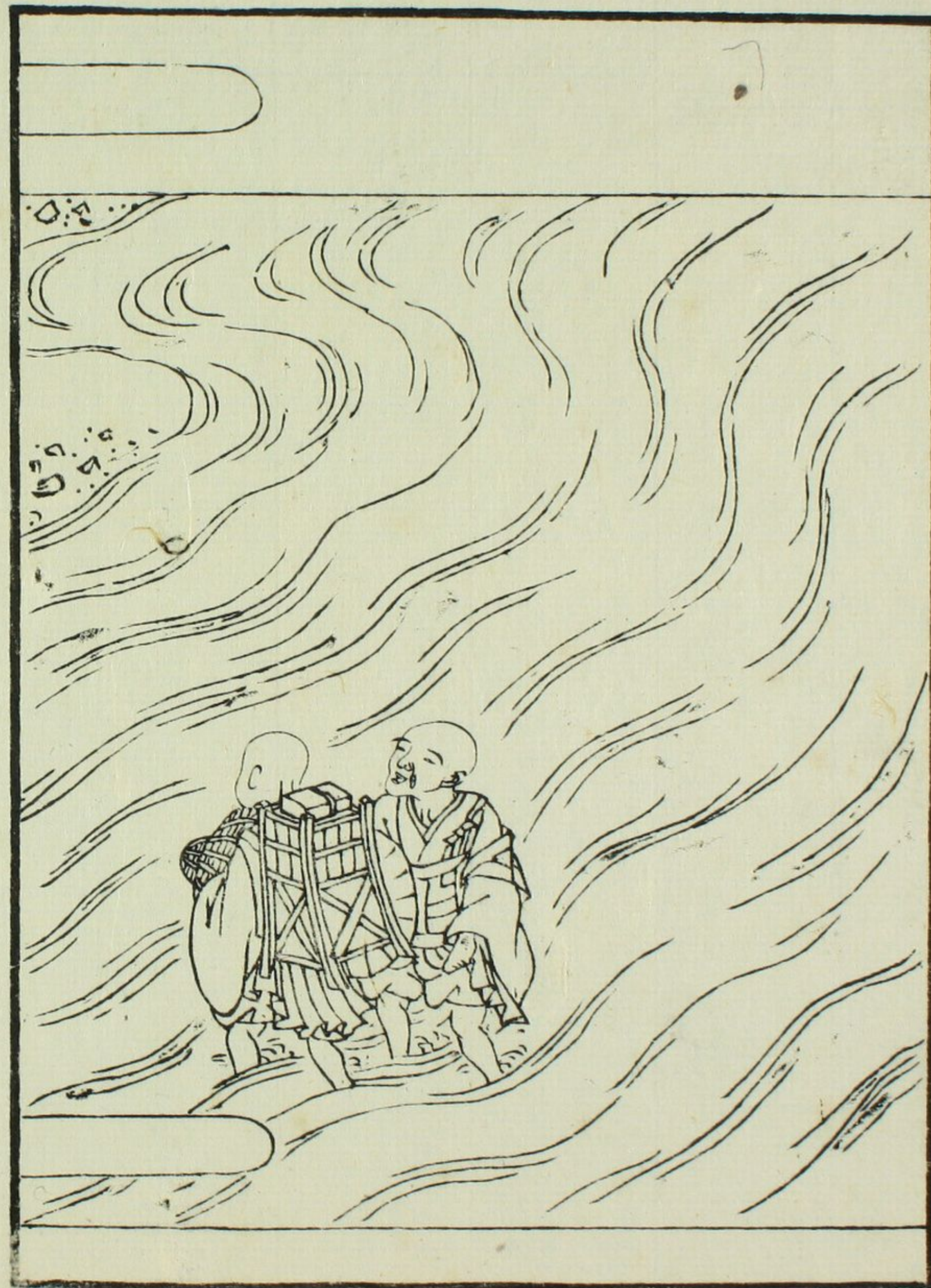
江津に逗留すしりくろ中津倉乃元帥北條家武元守一
切経板合の法會ありと云り至人派屋治しそ又定書白
派選ぶの仰り八月十六日江津と云り都比り折
十六歳の月をりまじり來りす相根山派越り又渡り

なりて替々体息のんそと云つての人家又燈火の又かた
直り葉月一人の光菊と云り我々もてりるに僕も
當社の宿をゆり今夜よりあひて遊宴するに唯今
夏すもの代現もりく控現の沖若かりしがそむじ
客僧の唯今と云り今奉り必誠と云り丁寧
餐應と云り平と云り元貴僧來り何れ也人ま
りし神勅と云り心と云り心と云り心と云り
よそそり奉りまじりあひり仍て一日逗留あり
てなれと云り至り人の化導神明乃
沖心のあひたまり



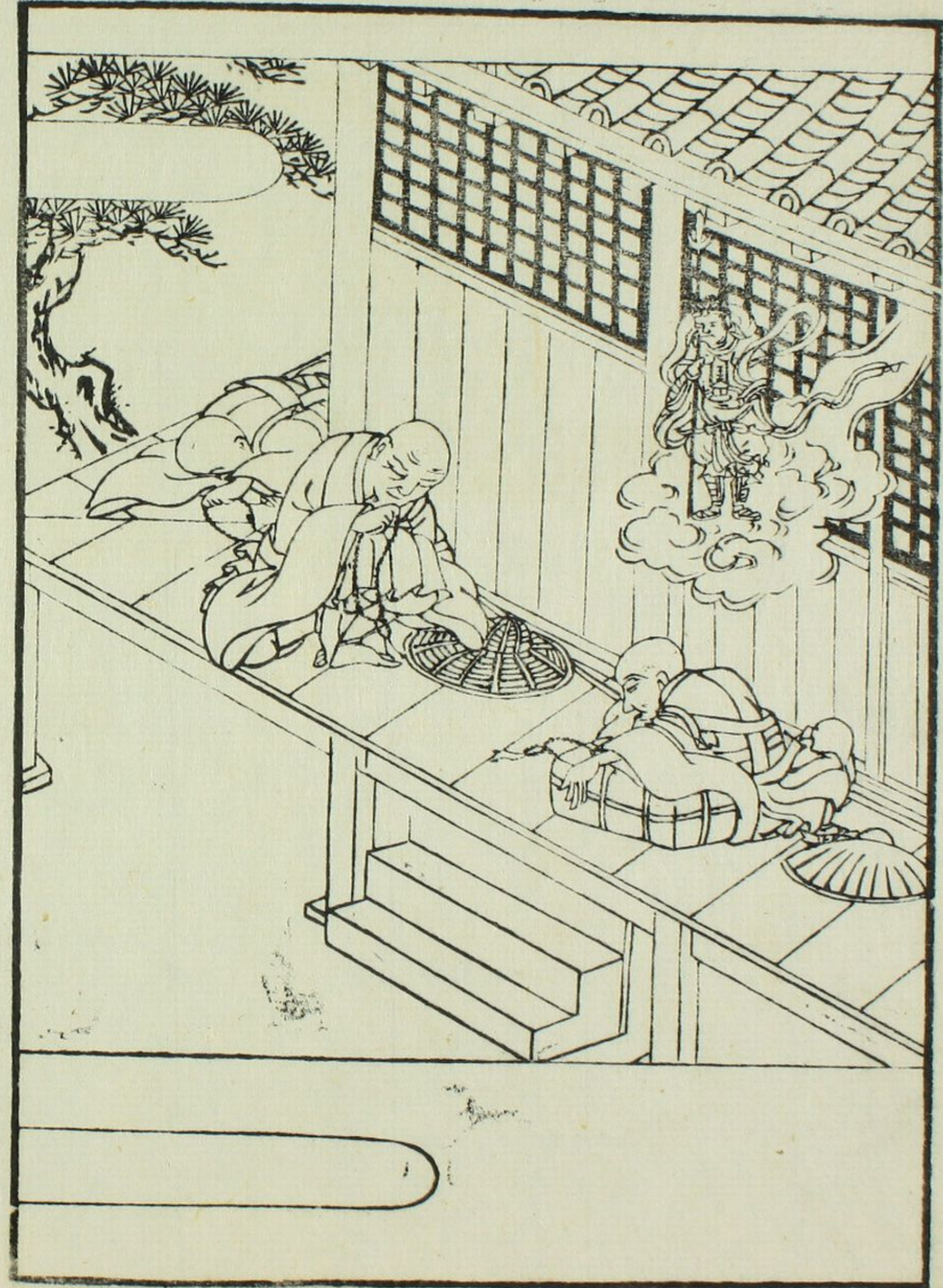
河下自駿河國阿部川よるあまの折より西に水か
ら海よりて旅人渡る事かふるに聖人も及ば下
を休あまのうし所の方よりいしげどかき僧一
人來りてすく川水の思より渡りし川の業因の
まよしく知ぬいごをたましく供奉の人をも我の附
て渡るまのいごをてかひぐな聖人の御まどと
り川へ入りりげても水は勝も及むとて定より
渡りてまよしして人まよば彼僧たちまら及の中へ
入るひぬ人をたふ驚さと思議なりとて及ばぬ
らまよしむばせのまよし常陸國霞浦を渡りし

より水原の本像と社夜直て登りしよりまよし本像
の勝より下り水よりゆりしよりまよし今
僧と社併ん化現くまよし思議よりまよし
中く思議なり
及すが有信の心業は及ばぬと九月
旬より遠に國東島の専信房の居所より
社より法化とたりしもの多しとて専信房
よりより留りてとてまよし年次終り



聖徳太子二月癸卯と云く春日皇子村の柳寺より
入りし又尾張伊勢の邊に人々を教ふ事ありて
四月下旬の比色濃より進江に越て本村に入りて
又言ぬ供奉の人々の村の天王堂よりて安曇と云り
寺僧よりて法許人定く安曇にいづくも旅石
をかりしと天王堂の縁よりかりかを安曇の松より
て進江の村よりて法許人定く安曇にいづくも旅石
鼻氏父子よりて法許人定く安曇にいづくも旅石
の佛法と守護を代りて今佛法に通の高僧よりて我
堂より安曇より法許人定く安曇にいづくも旅石

人よ若くのことすりて我法より師と法事より我
志所持の靈像法を堂より安曇よりて法許人定く
法許人定く安曇より法許人定く安曇にいづくも旅石
と云人不思議の事なりと云りて安曇より法許人定く
性大圓石鼻氏親子よりて法許人定く安曇にいづくも旅石
安曇より法許人定く安曇より法許人定く安曇にいづくも旅石
疑と云りて法許人定く安曇より法許人定く安曇にいづくも旅石
又入りて震浦感得の如き法を安曇より法許人定く安曇にいづくも旅石
門より法許人定く安曇より法許人定く安曇にいづくも旅石
左門より法許人定く安曇より法許人定く安曇にいづくも旅石



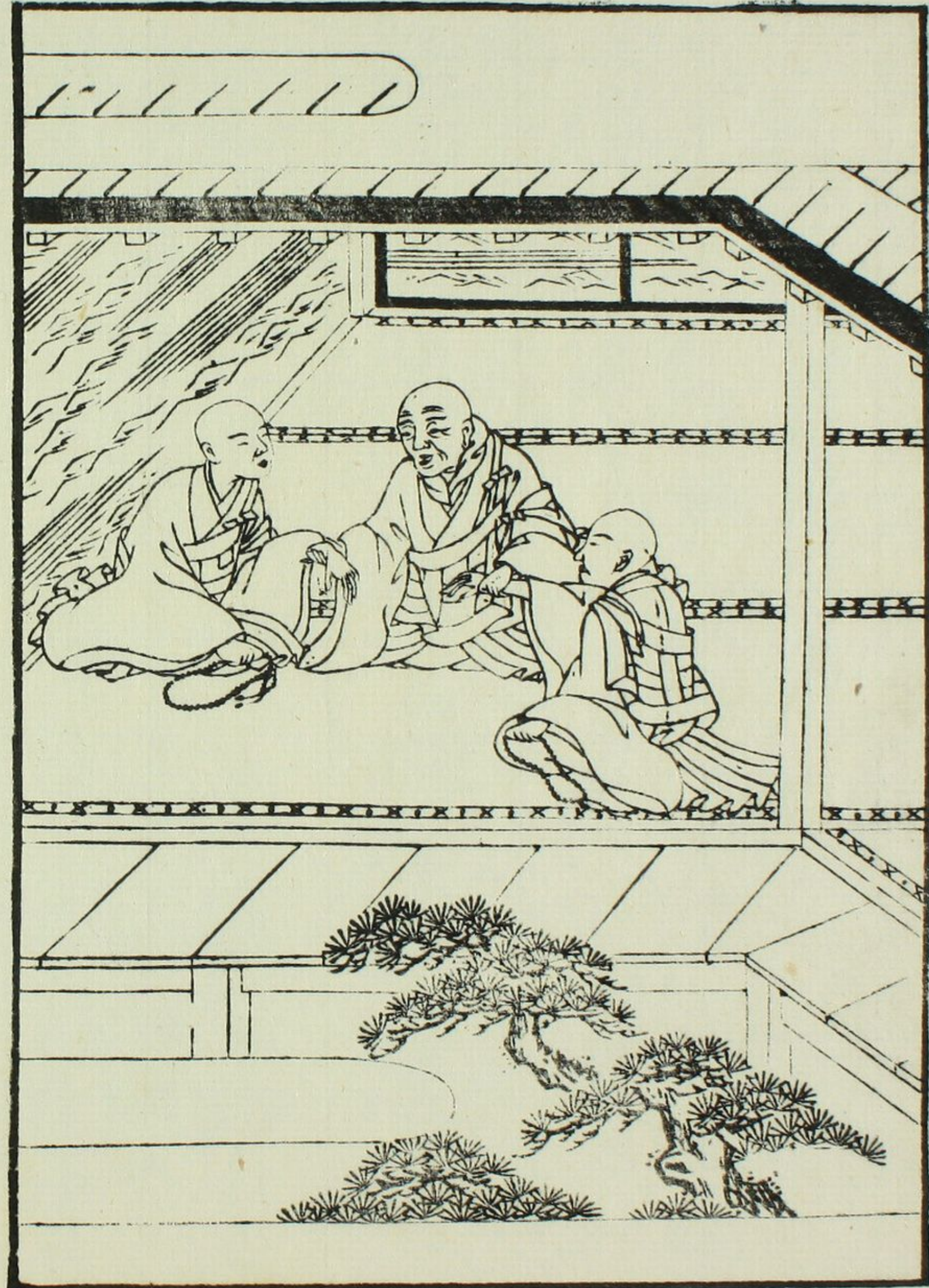
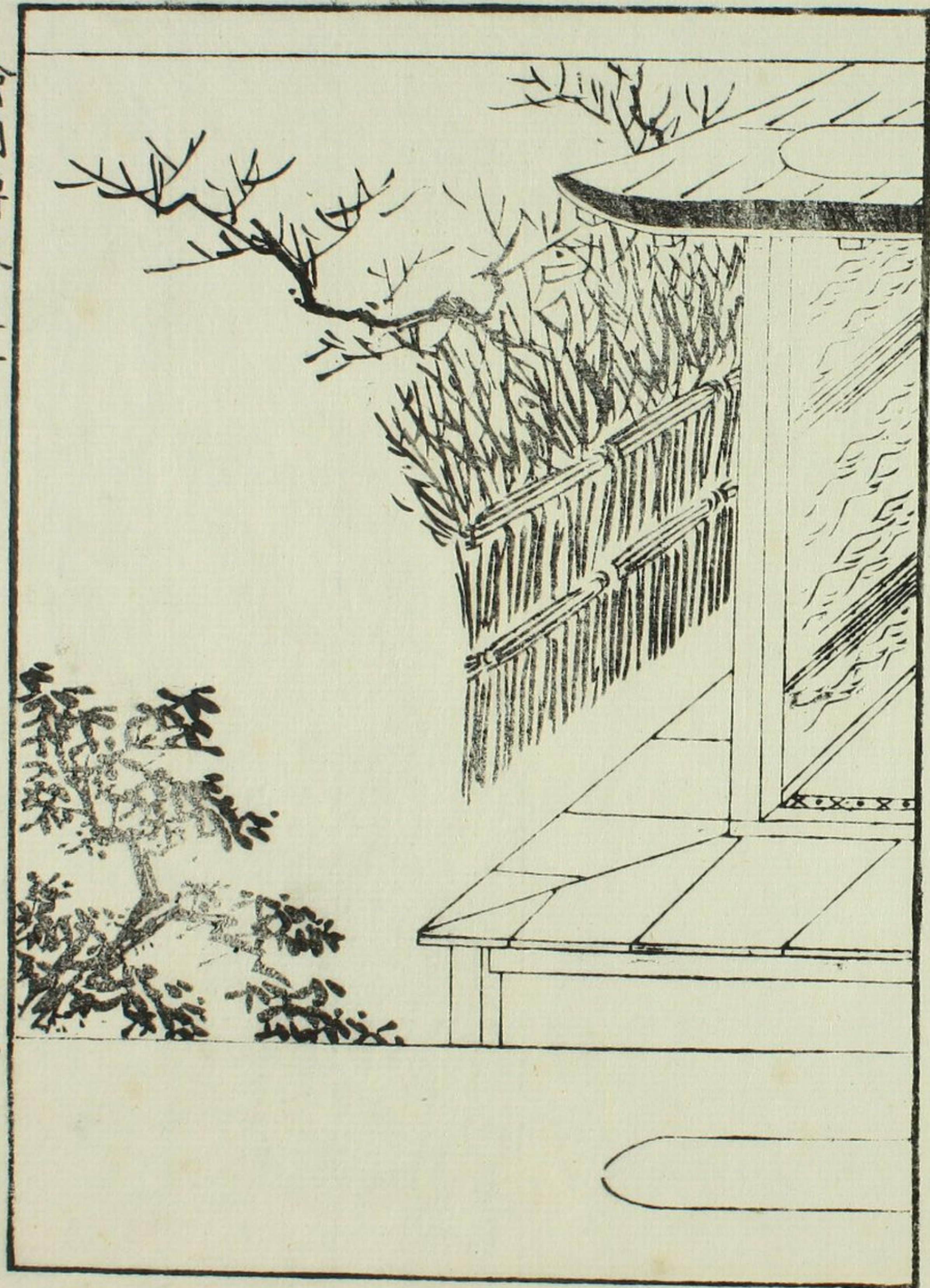
禎元年乙未四月廿四日より夫より七月まで
寺よきて法雨派をぎりて後天女寺よ
降て綿と織の瑞ゆり因て勅号は賜て錦織
之寺とりがく

同年八月四日けいふ郡よ志ましくして先國師の
沖坊入ふよ是と印信法師よりく使理と加へく
入法とゆきりり成り後九條教よりも西洞院の
沖所と成りりふく玉日の沖喜持のおよもゆき
バ業梅りありと切よ仰りりて後九月の廿日
解ふ西洞院一梅りたすいきや人仰りてさうく

今と郡よ名別保より專信へ東國よ下りて佛
性信よ志と合せて念佛と弘通せりよ吾れも
伊勢より未熟の老たは友訪のよ郡よ顯智
一人よ事よぬ是もわより伊勢一をんぢり
と沖坊よびと名と田舎一下りてさうりは
十菜の十月よび東國よ赴りてさうり二十
年修の春秋と歴て今又京師よゆりあり情
往事とさひありよ鬢髻よて美のさうりあか
い乃断金のむらびと病よむらくも神よの
煙よ之のりまいうり色の芝蘭の友は再よ

ば子く化野を露く消去ぬりて河帰流の初
 りり毎月五日源空聖人の月忌とし人々
 集會せり聲明の宗通は居指し念佛
 行し神志は師恩は報謝しるに
 日月の未帰流消えしにのち連位房性信房
 系系はあまの聖人河帰流の時思ひに
 して道より返さたりたりが性信の横曾根よ
 り連位の高田より志佛と人の沖名付して初
 預王より一雪を返おて登まらう翌年三月
 の末南衣兼光房と初して東國の沖門より日

返進て尋より進まばよあくるもこのころ
 武付ハ二條富小治よましく感を一條柳原又と
 三條坊門河東の岡河長水の邊處々小物位
 たり
 嘉禎三年五月下旬真佛上人上京わりて
 崎の沖坊を聖人よ對面つら流るに東の跡
 是末外き車ありして日月中旬顯智房派
 東國より十月月中旬小志佛と人も高田
 小下里とあり



專室房ハ聖人沖ノ系此時沖供ト出立らる
 聖人仰聞らる旨有りて武蔵國夫口の渡
 川ニテ陸奥ヨリテ亦ト返返勅せら
 たりが五年の春秋聖人臥床せざること餘
 一ヶ月思奉るを曆仁元年十一月ニ顯智房
 付て之系せざりて西洞院少して聖人沖
 對顔まゝして関東法法の有極探及
 少の沖流るに斜るに顯智專室とた衣
 小石お人の手とりて志佛と我解たり顯
 智と專室ととた衣の手かりとて親友の

涙ニ咽多量け時ふくや二代相承の徳人え
 たりと人々ふりて孝四年八月專室と又
 吾妻よびとたり

親鸞聖人繪詞傳卷二終

